
けんか上等！生徒会長 昇一郎！

滾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けんか上等！生徒会長 昇一郎！

【Nコード】

N7434A

【作者名】

滾

【あらすじ】

隆平のクラスに転校生が来た。しかしソイツはとんでもないヤツで・・・。

第一話 転校生

転校生が来る。

それは大体一週間前くらいから知らされていた。

高校で転校とは珍しい事だが、まあ、来てしまうのは仕方が無い。

だからこそ1-Aの生徒達は浮かれていたし、受け入れるムードは完璧だった。

男だろうか？

女だろうか？

先生の粹な計らいかどうかは知らないが、それは教えられていなかった。

それ故に先生と共に現れるのであろう転校生を、早く見たくて皆仕方が無く、

それは、ここに居る“橘 隆平”事、僕にも言えることだった。

「なあ、隆平！」

僕の隣の席、“三ノ輪 伸介”が体を乗り出してくる。

「何だよ？」

「男かな？女かな？」

伸介のテンションはもはやMAXを遥かに超えて大気圏を突破。今や衛星となって地球の周りをグルグル回っている。もはや回収は不可能。

こうなった伸介のテンションを抑えられるのは無理。

だが、僕はため息混じりに言う。

「お前、さっきからそれ、毎分一回の割合で言ってるぞ？」と。そうさ。

さっきからずっと、もうそれはそれはずっと、僕は同じ言葉を聞き続けている。

最初の一回は許せた。二回目も隆平のテンションの具合からしても大丈夫だった。三回目から少し鬱陶しくなってきた。四回目で顔を

しかめ始めた。五回目でビンタをした。六回目で腹にパンチした。七回目でアッパークットを顎にヒットさせた。八回目で喉を突いた。そして今回九回目。もうボロボロになった伸介に、僕は手を出す気にもなれない。

「黙って待つてろよ。その内来るのは間違いないんだから」

「何でお前そんなにテンション低いんだよ!？」

「お前に合わせてたら、多分僕は僕じゃなくなっちゃう」

言いながら、僕は一時限目の教科書をカバンから引っ張り出して引き出しに突っ込む。引き出しの中でプリント類がぐちゃぐちゃになっっている音がしたが、気にしない。

プリント達の悲鳴ともとれるぐちゃぐちゃ音を聞きつつ、ふと時計に目をやった。

もうそろそろチャイムが鳴るころだ。そしたら先生も来るだろう。

つまりは転校生も来るということだ。

そう考えたら、少しながら、やはりテンションが上がってきた。

女の子だったらいいな。とか考える。

別に男でもいいけど、最初は話しかけ辛いだろうな。まあ、伸介なら大丈夫だろう。

そんなことを考えているうちに、

キンコーンカーンコーン・・・

チャイムが鳴った。

「お!？来るんじゃない?？来るんじゃない?？」

「うるさいな。待つてろ」

言いながらも、少し僕の語調も高くなる。

やはり少しは期待してしまうのだ。

先生が来るのを待つてる時間がこんなに待ち遠しかった事など、恐らく今までなかっただろう。

気付けは、いつもはまだ教室中にはびこっている生徒達も、今日は

すでに席について先生　否。本当は転校生　を待っている。
そして遂に、

ガラガラガラ・・・

静寂の中に、扉を開ける音が響いた。

『おお・・・』

声が漏れる。

入ってきたのは先生だけで、どうやら転校生は廊下で待っているらしい。

先生は教壇の上に立って、

「ええー、おはよう」

と言った。

『おはようございま〜す』

いつもは無視する先生の挨拶も、今日は積極的に生徒全員で返事をする。

全員の顔がにこやかに見えるのも、決して気のせいじゃないだろう。予期せぬところでの生徒達の一致団結にも冷静に対処して、

「まあ」と、先生は廊下の方を見る。

「長々と話をして転校生を廊下に待たせるのは酷だからな。早速入ってもらおうでしょう」

その言葉に、生徒達のテンションはピーク。

が、

「しかし」と、先生は付け足す。

「いいか？」と。

「絶対に、驚くなよ？」と。

どういうことだろう？

誰もが首を傾げた。

勿論、それは僕も同じ。

伸介と顔を見合わせたが、「スゲー可愛い、とかじゃねえ？」とか
いう考えしか出てこなかった。

故にテンションは維持してそのまま続行。

すでに迎え入れムード全開の生徒達を見て、先生はうなずいた。

「解った」と。

「それじゃあ、入ってきてくれ」

言って、先生は廊下側に向かって手招きをした。その時の先生の渋
い顔を、僕はずっと忘れない。

瞬間

「おおーりゃああああああッ！」

ドバチゴーーンッ

扉が怪音と共に吹っ飛ぶのと同時に、怒声（？）と共に教室に飛び
込んできたのは、一人の男。

その男の風貌に、生徒達は驚愕する。

髪は逆立ち、色は銀。一昔前に流行った長ランを羽織り、背中には
“ けんか上等！（けんかは平仮名） ” を背負ってる。

身長は180後半はあろうかという長身に、格闘技かなにかやって
るですか？と尋ねなくなるガタイ。

男は、蹴っ飛ばして吹っ飛んだ扉をキチンと元に戻し、
息を吸って、

叫んだ。

「テメエラアアアアアッ！」

と。

「俺は今日からこのクラスに世話になる“神ノ山 昇一郎”様だッ！俺がこの学校に来たからには、この学校を全部俺の支配下に置いてやる！いいか！これからお前等は俺の下僕だぁぁぁぁッ！」男はそう吼え、

「ゲッホゲッホ！」

大声の出しすぎで、むせた。

これが、僕と男の出会い。

今時こんな出会いかよ、と突っ込まれかねない、これが僕、隆平と昇一郎の出会い。

第一話 転校生（後書き）

こんな転校生やだな。
という感じで、続きます。

第二話 二人の差

今時漫画でもありやしない登場の仕方で見えた転校生、神ノ山 昇
一郎くん。

そんな彼は今、

僕の隣に居ます。

伸介の逆。僕の左隣に。

何でこうなったのか。それを説明するためには、凡そ一分前に戻らなければいけない。

先生がおもむろにこう言った。

「よし。とりあえず学級委員の隣がいいだろ」と。

この瞬間、僕の背筋に冷たい汗が噴出した。

「よし」先生は僕を指差して、

「橘の隣、一個ずつ後ろにずれる。神ノ山、アイツの隣にそこにある机と椅子持って行け」

「ういッス！」

という訳で今に至る。

今更ながら、適当な気持ちで学級委員に立候補した自分が憎らしくなる。

僕は神ノ山君の方を見ることが出来ないまま、逆の伸介の方を見た。

「おい、席変わらないか？」

小声で、伸介に話しかけてみる。

が、

ブンッ

と音がしそうな勢いで、伸介は明後日の方向を向いた。

「ちょ、伸介！？お」

「おい橘、学級委員が喋ってんなよ」と、前から先生の声。

「あ、すいません」

僕はペコリと頭を下げて、

「よし、罰として後で神ノ山を学校案内してやれ」もの凄い勢いで上げた。

「え、え！？僕ですか！？」

僕は思わず立ち上がりそうになるのを堪えて、手を顔の前で振った。と、いうか、罰って先生・・・。

「いやいやいやいや！僕は駄目ですよ！ホラッ！何か・・・、あるじゃないですか！」

「何が？」

「何か・・・、ねえ！？伸介、なあ！何で向こう向いてるんだよ！こっち見ろって！なあ！おい！何で机を遠ざけるんだよ！？」

向こうを向きながら机を遠ざける伸介を見送って、僕はふと、神ノ山君の方を向いた。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。

めっちゃ見てた。

僕の方を、めっちゃ見てた。

腕を胸の前で組んで、眉間に皺を寄せて。神ノ山君が。そして、おもむろに口を開き、

「何だ、俺を案内するのが嫌なのか？」と。

「・・・いえ、是非案内させてください」

こう答える以外、僕にどうしろと・・・？

「ここが音楽室で、ここが準備室。ここはいつも鍵が掛かってるから、入れないよ。まあ入ろうとしないと思うけどね」

僕はこのように頭の中で台詞を考えておいていた。が、実際に口から出たのは、

「ここが音楽室で、ここが準備室です。ここはいつも鍵が掛かっておりますので、入らないようにしてください。あ、入らないと思いますすけれども」

だった。

駄目だ。

タメ口は駄目だ、と、脳が体に信号を送っている。

僕の体はその信号道通りに、まるでホテルマンのような口調で校内の説明をしているのだった。

しかも、当の転校生本人は何も言わずに歩いている。

だから僕は、本当に理解できているのか、それとも僕の口調にいらだっているのか解らず、心の中の葛藤で今にも白髪に大変身して真っ白に燃え尽きてしまう所だ。

が、

「おい」

突然の声。僕は思わず跳ねた。軽く1mくらい。

勿論、声の主は神ノ山君。

「な、何？」

僕はあくまでも「別に怖くなんかないぜ？」を強調した口調で答えた。

が、そんな事どうでもよさ気に、神ノ山君は言った。

「この学校の最強は誰だ？」

と。

「はえ？」

声を漏らしてしまったと気付いたのは、神ノ山君に胸グラをつかまれたからだ。

僕はぐぐつと持ち上げられて、下手したら足が浮きそうだった。

「てめえ！今『コイツ漫画の見すぎなんじゃねえの？最強は誰、って、そんなの居るわけないじゃん』って思っただろう！」

「何そのピンポイントな読心術！？違う違う！そんな事思っていないよ！」

言って、僕は床に下ろされた。

カッターシャツを調えながら、「ただ」と言う。

「ああ？」

神ノ山君は不機嫌そうな顔をした。

本当に、神ノ山君が言ったようなことは思っていない。ただ、

「神ノ山君は、最強の人に会ってどうするの？」

「決まってるだろう！」

神ノ山君は大仰に手を仰いで言った。

「ソイツをぶっ倒して、俺が最強になるんだ！」と。

けど、僕の表情は多分変わらなかった。

「そう」

とだけ、呟いた。

自分でも冷たいと思えるような声が出た。

「止めたほうがいいよ」

「ああ！？」

「神ノ山君が思ってるほど、この学校は“簡単”じゃな

」

言い終わるより先に、僕は胸グラを再びつかまれていた。

さつきより強く。

神ノ山君の顔が、“冗談”じゃない顔になってた。

「テメエ、俺を舐めてんのか？」

冷たい、そんな声を聞く。

だけど、

「舐めてるのか、って？」

多分僕の声の方が、遥かに冷たかったと思う。

刹那

僕は神ノ山君の腕を両手で捻って、背中側に回した。

「うおッ!？」

神ノ山君は予想もしてなかったのだろう。何の抵抗も出来ないまま、廊下に倒れこんだ。

僕は神ノ山君の手を背中側に回したまま、背中を膝で押さえつけた。
「舐めてるのかって？」

さつきと同じ事を、もう一回言う。

「それを言うなら、君の方さ。この学校のこと、何も知らずに来たの？」

僕は手を離して、神ノ山君の手を引いて立たせた。

知らないようだから、と、“この学校”についての説明をする。

「この学校は、将来を担う“総合格闘技”のアスリート達を集めた、“体育会系”のみの学校だよ？空手、柔道、柔術、テコンドー、マシーナルアーツ、バリー・トゥード、合気道、ボクシング、キック、古武道、相撲、ムエタイ、中国拳法、プロレス、サンボ。細かく上げたらキリが無い程ある格闘技のアスリートを集めたのがこの学校。

それを知らずにどう入学してきたかは知らないけど、そんじよそこらの学校で威張ってた様な人が最強を目指せる場所じゃないよ」

「……お前も、何かやってたのか？」

「家が橋護身術って言う、合気道がルーツの道場やってるんだ」
一応免許皆伝でね、とは言わなかった。

「道理で」

神ノ山君は腕を回した。

何故だろう。

その表情は僅かに笑っているように見える。

「何？」

僕は少しそれに腹が立って、冷たい口調で言った。

それでも表情を変えることなく神ノ山君は口を開き、

「いや、実は俺」

「

「よお、テメーか。今日入ってきた転校生ってのは」

言い終わる前に、別の誰かの声にかき消された。

僕はそっちのほうへ向き直って、

「島津……」

思わず呟いていた。

声の主は、“島津 一平”。

キック（ボクシング）と柔道とを会得している異色の格闘家。

その後ろには空手の“宮野”と同じく空手の“岸本”が居る。

三人とも一年生で、その中でも上位には入る奴等だ。

「何か俺に用か？」

そっちを向いて、神ノ山君が言った。

「ふはは。話に聞いた通り、スゲエ髪だ。銀か。その髪、刈って坊主にしてやるうか？もっと迫力が出るぜ」

ひゃひゃひゃ、と、何とも品の無い声で三人は笑った。

「言いたいことはそれだけか？」

神ノ山君が拳を握ったのが解った。

が、駄目だ。神ノ山君には一人でも分が悪いのに、三人を相手にするなんて無謀すぎる。

「待とうよ」

僕は三人と神ノ山君の間に体を滑り込ませた。これで神ノ山君は手が出せない。

「彼は今日転校してきたばかりなんだ。そんな急に苛めるのはおかしいだろ？」

僕は言った。これ以上いざこざが増えるのは勘弁して欲しい。

勤めて丁寧に言っただつもりだったのだが、島津にはどうもそうは聞こえなかったらしい。

「何だ橋。いつから俺に命令できるようになったんだ？」

眉間に皺を寄せて、島津は言った。

ただ、僕も馬鹿にされるのは好きじゃない。

「・・・元々、君に諂ってたつもりも無いけどね」

この一言に、島津は切れたらしい。

有無を言わず、顎に向けて右拳が飛んできた。

「！」

一足飛びで後ろに逃げる。が、僅かに掠った。

キックでも、ボクサーの拳はやはり早い。

「舐めんなボケツ！！」

島津の後ろから宮野と岸本が出てくる。

そして同時に繰り出される、右足のローと左手の正拳突き。

僕は体を捻って正拳突きを”いなして”ローを避けた。

我ながら最高の回避だったが、

「！」

体を捻った目の前。

島津が体をねじってパンチの“タメ”を作っていた。

それが見えた瞬間に、“タメ”は終わって“発射”に入っている。自分は体を捻ったばかり。

避けられない
！

僕は思わず目を瞑って覚悟を

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

衝撃が、来なかった。

恐る恐る、ゆっくり、目を開けると、

「うわ！」

目の前には島津の拳。

思わず仰け反ったが、

「・・・・・・・・？」

その拳が接近してくることは無かった。

何故なら、

「テ、テメエ・・・・！」

掴んでいた。

神ノ山君が、

島津の腕を。

「は、離せコラ・・・・！」

「ヘッ！」

瞬間、

神ノ山君が島津の腕を引いた。

「うわッ！？」

島津はバランスを崩しながら神ノ山君の方に倒れこみ、
ドスッ

「ぐえ・・・ッ！」

同時に島津のボディーに拳がめり込んだ。

「おぐ・・・っ」

膝を突いて、そのまま意識を失った島津。

僕はその一連の流れを、ただ呆然と見つめていた

第二話 二人の差（後書き）

何かコメディっぽくなくなってきましたが、一応コメディです。
楽しんでいただければ幸い。

第三話 本当の力（前書き）

コメディイです。

誰が何と言おうとコメディイです。

第三話 本当の力

島津が倒された。

この事実には本当に想定外の範囲外で、僕は呆然と立ち尽くしたまま動けなかった。

「はッ！雑魚が！」

倒れている島津に、神ノ山君はそう吐き捨てた。その顔はどこか楽しそうに見える。

僕はしばらく呆然としていたが、ふと、

「み、宮野と岸本は・・・！？」

と思い出して、僕はそっちに視線をやった。
が、

「！？」

そこには、島津同様に倒れる二人の姿。

「ソイツ等、本当に格闘技やってんのか？」

倒れている二人を見やり、神ノ山君は言う。

「そんなに歯応えの無い奴等初めてだったぜ」と。

「・・・」

僕は島津達と神ノ山君を交互に見た。

どう考えてもありえない。

僕に簡単に転がされる程度の人が、島津達に勝てるとは思えない。

しかも、神ノ山君には怪我が無いように見える。

あの二人に無傷で勝てる程の実力者が、僕に簡単に手を取られるだろうか？いや、それは考えられない。

僕の怪訝そうな表情を読み取ったのだろうか、

「ああ、悪いな」と、神ノ山君は言った。

「さっき、ソレ付けてたんだわ」と。

ソレ、と、神ノ山君は宮野の倒れている横を指差した。

「ソレ？」

僕はそつちを見る。

そこには五つの何かが転がっていた。

何だろう？見たことが有る物だ・・・。

僕はソレを手にとって、

「！？」

驚愕した。

「神ノ山君、ずっとコレを付けてたの・・・？」

僕が手に取った物。

それは“パワーアングル”だった。

腕や足につけて筋肉を鍛える、錘だ。が、持った瞬間すぐ解った。

コレは普通じゃない。

「よくまあ、こんな重いものを・・・」

「ああ、両腕あわせて30Kgだからな」

重かった。

通常パワーアングルといえは5Kgで重い方だ。

その三倍の重さ。それを、。片腕につけていた、と言う。

「足は両方で40Kg。あと胴回りに10Kgだ。さすがに外したら軽いぜ！」

神ノ山君はそう言つて腕をブンブン回した。 擲揄ではなく、腕を振ると本当に空気が「ブン」と唸る。

「合計で、80Kgだよ・・・？」

下手したら神ノ山君と同じ位の重さになる。つまり、常時自分と同じ重さの人を体全体で負ぶっている感覚。

「よくその腕で、僕を持ち上げれたね」

「ハッ！テメエ、俺を誰だよ思つてる？」

言つて、神ノ山君はニヤリと笑った。 擲揄ではなく、頬を上げると「ニヤリ」と音が鳴るわけは勿論無かった。

島津なんかじゃ敵うわけ無い・・・。

廊下に無残に転がる島津を見て、僕はそう認識した。

桁が違う、では無く、単位が違う。たとえばおかしいが、ミリメートルmmがキロメートルkmに齒向かうかのような。

仮に神ノ山君が逆立ちしたって、島津では勝てないのだ。

「……………うん、間違ってない。」

「それより、テメエ！」

「は、はいっ!？」

僕はビシッと腕をまっすぐに伸ばした。

神ノ山君の表情は怒っているように見える。

ああ……、さっき言った生意気な事の事だろうか……？
謝るべきだろうか……？やばい、近づいてくる！

「テメエ！」

「うわっ！」

僕は目を閉じた。

ガシッ、と、頭をつかまれる感触。

痛みは、無い。

「?」

僕は目を開けた。

目の前で、ニヤツと笑っている神ノ山君が見えた。

「テメエを、この学校で最初の下僕にしてやる」

僕の頭をぐるぐる回して、そう言った。

「へ……………」

僕は呆けた声しか出なかった。

「お前とは長い付き合いになりそうだ。それに」

と、僕の頭から手が離れる。

神ノ山君は言った。

「テメエとは、昔会ってる気がする」

言って、神ノ山君は歩き出した。

・・・・・・またいつでもかかって来いよ！

不意に、幼い頃の記憶の断片が掘り起こされる。

「ああ・・・・、そういえば・・・・」

僕も、君と会ってる気がする。

くるっ、と神ノ山君が振り返る。

「遅えぞ“隆平”！下僕が俺様を待たせてんじゃねえッ！」
声がする。

僕は笑って、

「今行くよ！“昇一郎”！」

駆け足で昇一郎の方へ向かった。

「テメエ！何呼び捨てにしてくれてんだコラァッ！」

「わっ！痛ッ！ご、ごめん昇一郎！」

「テメエエエエエエエエッ！！！」

僕等は校内案内を続けた。

この時、

「活きの良い転校生が来たもんだな」

この声を気付くことは無く、

昇一郎を取り巻く騒動に僕まで巻き込まれるなんて、思ってたなかった。

第三話 本当の力（後書き）

コメ（略）。

三話目です。最終回みたいなノリでしたが、残念ながら続きます。何はともあれ、楽しんで頂ければ幸いです。

第四話 空腹と出会い

存在感、という言葉がある。

それは決して見えるものではなく、体で感じるものである。

それは時には美しさとして。

それは時に畏怖として。

さまざまな形として人はソレを感じる。

それ程の“気配”を感じさせるには並じやない訓練が必要だと思われる。

だから、

僕の隣で授業中にも関わらず爆睡中の昇一郎も、そんな訓練をしたのだろうか？

「ぐごがぁあああぁあ！」

昇一郎が立てている躰いびきは教室を越えて廊下まで響いている。

が、先生はそれを注意しない。

と、言うより出来ない。

何故なら、

怖いからだ。

単純に。

昇一郎が。

この学校の教師は普通じゃない。それなりの腕を持っていないと生徒を収められないからだ。

だから必然的に、生徒達よりも腕の立つ教師が雇われる。その位になると、人は一目で相手の技量や対戦経験を読み取れるようになる。つまり、

読み取ったのだ。

昇一郎から。

彼の技量、対戦経験を。

それを踏まえて注意が出来ない。つまりは自分では収めきれないと判断したと言うことだ。

そんな“存在感”を放ちながら、彼は僕の隣で授業中四時限目が終わるまで眠り続けるのだった。

「おい、我が下僕、隆平」

「だから、僕がいつ下僕になったのさ？」

授業終了のチャイムと同時に起き上がった昇一郎は、挨拶の後に開口一番にそう言った。

「腹が減った。飯を寄越せ」

「何で！？自分のは！？」

「食った」

「何時！？」

「学校来る前」

「意味無い！全くお弁当の意味が無い！ちよ、駄目だって！僕のお弁当！お母さんが作ってくれたんだから！解った！待って！マッテーッ！」

と、いうわけで、僕は昇一郎を連れて学校案内を再開していた。

さつき島津云々達とドンパチやったせいで、結局最後まで案内が出来てなかったからだ。

それに食堂を紹介しておかないと僕の弁当が危険に晒される。

「ここが食堂だよ。この名物は一杯五百円のチャーシュー麺。少し多めにチャーシューを多くして貰えるときがあるんだよ。さ、行ってくるといいよ。・・・え？何その手？え？お金が無い？え、イヤだよ！僕だってお金ないんだから！いや、あるけどもそんな人に渡すまで持つて、って、あ！いつの間に！？だ、駄目だって！持つてっちゃ！何！？その冷めた目！？五月蠅い、って、君が財布を・・・！ああ！皆まで！？そんな、ひどいよ！僕の財布　　ツツ！　　！」

「ふう」

昇一郎は食堂名物のチャーシュー麺を食べた後（三杯）、教室に戻ることにした。

と、言うか、それくらいか転校初日にすることなんて無い。学校を見て回るのも、さっきの島津やらの件もあるし。それに何より面倒だ。

食堂を出、さつき隆平と一緒に来た廊下を逆に歩く。

途中、すれ違う全員が振り返って昇一郎を見ていたが、そんなことには全く気付く気配も無い。

「ふふあゝ」

さつきまで眠っていたのにも関わらず欠伸を一つ。

目を擦って大きく伸びをして、階段の横を通り過ぎようとした時だ。昇一郎は欠伸を止めて前に入った。

異質。

明らかな“異質”に、昇一郎は足を止めた。

それは三人組だった。

一人は顔の下半分を布で覆い隠している男。身長は高く、恐らく昇一郎よりも少し高い。190前半、後半はあるだろうと思われる。

細身に見えるが、恐らくアレはシャープな筋肉。それを思わせる、無駄の無い歩き方をしている。

二人目は更に異質。顔の上半分を布に隠し、見えているのは口元だけ。口元は大きく歯を見せ笑っている。その男の体系はパツと見るところの肥満。それも相当の。しかしよく見るとそれはかなり太い筋肉だと解る。顔もふっくらとしていて、一見ではただの肥満と思われるわけてしまいかねない、それでも確かに筋肉をつけた体系。腕が下

手したら頭と同じくらいに太い。前に屈むようにして歩いている。そして、

三人目。

見た目、及び体軀は言うところの普通。筋肉質でもなく、かといって肥満でも痩せ型でもない。いたって普通に見えるソレだが、昇一郎は並々ならぬ“何か”を感じていた。

それはソイツの“貌”。“表情”。

ソイツの“眼”から、他の二人以上の何かを感じた。

事実、ソイツを中心に、他の二人は一步を後ろに警護しているように歩いている。

強いな・・・。

昇一郎は思った。

自然と拳を握り締める。

向こうも、さつきからずっと視線がこっちに向いている。

こちらへ歩きながら、確かに双方共に闘争のオーラのようなものを漲らせていた。

が、

「キャアッ！」

突然声は上から聞こえた。

昇一郎は反射的に上を見上げた。

女生徒の一人が、階段の上から足を滑らせて下に落ちようとしていた。

「あ・・・」

と言う間に、女生徒は床へと距離を詰めている。

チツ！ 錘が・・・ッ！

錘の所為で、とつさの事態に体が上手く動かない。

もう、落ちる。

そう昇一郎が考えた、
その刹那。

ガシッ

女生徒は抱えられていた。
抱えたのは昇一郎ではない。

さっきの、異質三人組の一人。顔の上半分を布で隠している、あの男だ。

「あ、ありがとうございます！」

床に静かに降ろされた女生徒は、そうお礼を言って階段を駆け上がっていった。

男は去り行く女生徒に大きく手を振っていた。「ぐふぐふ」言いながら。

「オイ！鋼器（きこう）、行くぞ！」

声に、昇一郎は振り返った。二人が男　鋼器と呼ばれていた
を呼んでいた。

「ぐふ・・・！」

男はそう答えて（？）、二人の下に戻った。

昇一郎はその流れを呆然と見送っていた。

中心に居た男が去り際、昇一郎に嘲笑気味な笑みを投げた事に、昇一郎は気付いていた。

第四話 空腹と出会い（後書き）

前話から長く間が開いてしまいました。

ネットが&a m p ; # 3 2 3 6 3 ・がらなくなったり小説のネタのデータが一部消失したり色々重なってしまい、この用になってしまいました。

が、これからまたちよくちよく書いていきますのでよろしくお願ひします。

今回も、楽しんで頂ければ幸いです。

第五話 説明

「隆平・・・」

呼ばれて振り返ると、昇一郎が腕を組んで立っていた。

「あ、戻ってきたの？」

「・・・」

「もう、僕の財布返してよ！」

「アイツ等、何モンだ？」

「へ？いやそんなシリアスな顔して誤魔化そうたってそんな手には

」

「あの三人組は何モンだ？」

「乗らないよ・・・、って、三人組・・・？」

「ああ、さつき見たんだ。階段の所だな。三人共かなりの“異形”だった。あんな奴等だ。大層有名だろう？」

昇一郎は言って、ニヤリ、と笑った。

笑っている、というより、楽しんでいる、もしくは楽しもうとしている、そんな感じを受ける。

まるでこれから新発売のゲームを買いに行く子供のような、これから起こる“何か”に胸を躍らせているようだった。

“あの人達”を見ても、笑ってられるのか・・・。

僕も半ば呆れたように笑って、

「教えるよ」

と言った。

ただ、長い話になるよ。と、付け加えて。

「上等だ」

昇一郎は更に強くニヤリと笑った。

ただ時間が時間だけに、説明は五、六時限目が終わった後。放課後に話すことにした。

「で？」

日が傾き、人が少なくなってきた教室で、昇一郎は僕の隣で言った。
「長い話つてのは？」と。

僕は頷いて、頭の中で整理しておいた説明を始めた。

あの三人組は、この学校でも有名な三人だった。

顔の上部、下部を隠していた二人は実は双子で、一つ上の学年の二年生。

名前は漸樹と鋼器。俗に前鬼と後鬼として知られる鬼と同じ名前だ。そして昇一郎が一番威圧を感じたと言う男は三人のリーダー格の男で、我有朝彦^{がう}という、漸樹と鋼器とは全くの他人の男。

朝彦の父は某有名大企業の社長をしていたが、小さな頃から息子の朝彦をスパルタで鍛え続けていた。

よくイメージされる“お坊ちやま”とは正反対に育てられた朝彦は、今ではこの学園でも屈指の実力者に成長した。

漸樹と鋼器には両親が居らず、小さい頃に朝彦の父に朝彦の側近として引き取られた。

今でもその関係は変わらず、未だに漸樹と鋼器は朝彦に忠誠を誓い、朝彦の命令で何でもする。が、朝彦自身二人を部下とは思っておらず、友達と見ている。

朝彦は基本本人との付き合いを拒み、漸樹、鋼器兄弟以外とは会話もしない。

あの三人組は周りからは“三連^{みつれ}”と呼ばれて居る。

そこまで説明して、

「それからね」

と、僕は続ける。

授業中鼾をかいて眠っていた人物とは思えないほど、昇一郎は真剣な眼差しで僕の話聞いていた。

「あの人は、“生徒会員”なんだ」

と、僕は言った。

昇一郎の眉がピクリ、と動き、

「生徒会員？」

と僕が言った言葉を繰り返した。

だからなんだ？と言いたげな視線が、昇一郎から投げかけられる。

ここで僕は“三連”の説明から、“生徒会”についての説明に趣旨を変えることにした。

この学園の“生徒会”はそこら辺の学校とは全く異なるもの。

この学園での“生徒会”は実質的に教師並の権力を持ち、生徒会の言う事は殆ど絶対。

生徒会員には年に二回交代時期があり、その度に恒例の行事が行われる。

「行事？」

腕組をしていた腕を解いて、昇一郎は椅子にもたれかかった。

「そう、行事さ」

僕も言いながら、椅子に深く座りなおした。

そして、続ける。

行事とは、それまでの“生徒会員”と新たに会員になりたい生徒との抗争。

その抗争の中で扱われた10人だけが、生徒会員の一員として認知される。

“三連”の朝彦はその生徒会の会員で、漸樹、鋼器兄弟はそれの“予備軍”の一員。

“予備軍”と言うのは本来無いものだが、学園の中の生徒会に含まれていない実力者がそう呼ばれている。

予備軍は生徒会の次に力を持つ。

予備軍の中には生徒会以上の力をもつ人もいるが、様々な理由で生

徒会に入らない事もある。

「って感じなんだけど、どう？解った？」

「・・・・・・」

「？」

昇一郎は一点を見つめたまま黙っていた。

何だろう・・・・？何か思うところがあったのだろうか？

「昇一郎・・・・？」

「・・・・・・」

「どうした・・・・？」

「・・・・ンゴ・・・・」

「は？」

「・・・・グゴ・・・・」

「グゴ？」

何だろう、この訝みたいな声は？

「まさか・・・・」

嫌な予感。それを確かめるため、僕は思いっきり息を吸い込んだ。

そして、

「昇一郎おおおおッ！！！」

叫んでやった。

「ッハ！？何だ！？あ！？あ、うん！そうか！OK！そういうことか！よく解った！」

「嘘だ！今寝てたよね！？目開けながら！何その妙技！？どこから寝てたの！？はっ！？最初！？最初ッ！？会話してたジャン！ちゃんと！何！？寝言！？寝言ッ！？何その神業！？何！？何その「逆切れするぜ？」みたいな険しい目！？僕！？悪いの僕！？違っよね！？ちよっ・・・・！昇一郎どこに行く？！走るな！廊下を！くそっ！早い！何だこの速度！？追いつけない！ちよっ！おい！昇一郎おおおおお！」

むなしく廊下に僕の叫び声がこだましました。

第五話 説明（後書き）

無理やり最後をギャグにしました。
よくよく考えると有り得ない学校だと思います。
今回も楽しんで頂ければ幸いです。

第六話 美冬先輩

「よし、よく解った！」

椅子に偉そうに座りながら、昇一郎はそう言った。というかむしろ言い放った。

「解った、じゃないよ！」

ゼエ、ハア……。

荒れた息を肩で整えながら、僕は昇一郎を睨みつけた。

あれから凡そ二十分間に渡り学校内を鬼ごつこの要領で追い掛け回し、結果錘を付けたままの昇一郎が逃げ切れるはずもなく、僕は再び教室に昇一郎を連れ戻してもう一回最初から説明をしていた。

「本当に解った！？今度は寝言じゃないよね！？」

「大丈夫だ。覚えた。あいつ等は生徒会。で、生徒会の下が予備軍。だろう？」

「だろう？じゃないよ……」

僕は深くため息をついて、ふと、壁に掛けられている時計を確認した。

「あ……、ホラ、無駄に話に時間使っちゃったから……。見てよ時計。もう七時だよ……」

時計の針は短針が七を少し過ぎた辺り。

外は既に空を茜色に染めていて、更に言えば僅かながら茜の中に暗さが見え隠れしている。

「ふう……。もういいや。帰ろう？昇一郎は帰りは自転車？電車？」

「あ？俺は歩きだ。近いところに越してきたからな」

「そうなんだ？」

なんて、そんな会話をしながら教室を出る。

最後に教室を出る人は鍵を閉めていかなければいけないから、ちゃんとその通りに鍵を閉める。

「なんだ？お前そんな事する係なのか？」

僕が鍵を掛けているのを見て昇一郎が言った。

扉が閉まったか確認しつつ、

「違うけど」

ガチャガチャ。どうやら閉まったらしい。

「最後の人は閉めとかなきゃいけない決まりだから」

「ふうん」

「ふうん、って、君の所為なんだよ？解ってる？」

「あーあー、はいはい」

言いながらメンドくさそうな顔をした。

絶対に解っていない。100%。

ああ、もういいや・・・。

さて、

と、僕は一階まで降りると職員室に向かった。

「ん？どこ行くんだ？」

「あ、職員室に鍵を置きにね」

鍵を持ち上げて、僕は言った。

「そうか」

言いながら、何故だろう。昇一郎もついて来た。

「何？昇一郎も職員室に用？」

「あ？別に」

？

もしかしたら、一応悪い、とは思っているのだろうか。

案外解ってないことも無いかな、とか考えながら、僕達は職員室へ向かった。

「失礼しました」

鍵を返して職員室を出る。

昇一郎は職員室の外で僕が出てくるのをちゃんと待っていた。

「よし、帰るぞ」

昇一郎が踵を返して言った。

僕は昇一郎の横に並んで、今度は自転車置き場に歩を進めて

「隆平じゃないか」

後ろから声がした。

「え？」

「ん？」

僕と一緒に昇一郎も振り返る。

振り返った先。そこには弓道着に身を包んだ、“大和撫子”的な女性
性が立っていた。

「誰だ、隆平？」

小さな声で昇一郎が聞いてきた。

「え？ああ、僕の先輩だよ。美冬先輩」

軽い紹介をしながら、美冬先輩をみる。

美冬先輩は額の汗を手で拭いながら、こっちに歩いてきた。

ちょうど逆光で先輩が光ってるように見える。

いや、実際どこに居ても先輩は光って見えるが。・・・なんちゃつて。

「ん？この大きな子は誰だ？見た事のない顔だが・・・」

美冬先輩は昇一郎の前まで気、見上げて言った。

いや、僕からすれば美冬先輩も大きい。僕の身長が168だから、
多分175位だと思う。

「あ、えーっと・・・この人は、今日転校してきた神ノ山 昇一
郎君です。昇一郎。この人は美冬先輩、っていつて、僕の道場の門
下生の一人なんだ」

「どうも」と昇一郎。

「はじめまして」と美冬先輩。

「そうか、君だね？今日島津を伸したっていう転校生は」
先輩は表情を明るくして言った。

「え？もう噂になってるんですか？」

まだ一日経ってないのに！？と、僕はちょっと不安になった。が、
「ああ」

美冬先輩は頷いて、

顔を上げたとき、先輩の顔は冷たい笑顔のそれに変わっていた。

「たかが島津」を倒した位で偉そうにしてる転校生がいる、って
ね」

言って、先輩は更に楽しそうに笑った。

冷たい笑顔で、楽しそうに。

「ああ？」

昇一郎の声が途端に鋭利なものになるのが、隣から直ぐに解った。

「し、昇一郎？せ、先輩何言ってるんですか？別に昇一郎は偉そうに
なんか・・・」

必死にフオローに入る。昇一郎と先輩の間にすべるように体を入れて、
「ははは」と決して笑えてない声を出した。

「ふふ、冗談だよ」

先輩はそう言って右手をパタパタした。

悪い悪い。

「冗談冗談」

言って、美冬先輩は何も無かったかのように僕と正一郎の横を素通り
していきこうとする。

「え、あ、先輩！？」

僕は振り返る。

「隆平、明日は道場を休むから、と、師匠に伝えておいてくれ」

こっちを振り向くことなく、先輩はそう言っ歩いていく。
が、ふと、止まって、

「ああ、それと」言った。

首だけをこっちに向けて、ここからでも解る笑みで言った。

「我有には気をつけなよ」と。

再び歩き出した先輩は、もう振り返ることは無かった。

第六話 美冬先輩（後書き）

やっとこさ女キャラ登場です。

ここからちよつとずつキャラが増えていく予定なので今後ともよろしくお願いします。

六点五話 臆

『我有には気をつけなよ』

美冬先輩のあの一言が気になった。

気をつける。

何をだろう？

アレは僕に言ったのか、それとも昇一郎に言ったのか。

僕は考えながら、向かってくる練習生を投げ飛ばした。

「ほじゃッ！」

奇妙な声を上げて床に叩きつけられる練習生。

すかさず立ち上がって、再び僕に向かつて距離を詰めてくる。

今僕は自分の家にある道場で練習生を相手取った組み手をしていた。

そこそこの実力者ではあるが、あの学校に通っていると、この程度の子ならば腐るほどいる。

しかし、と僕は構えを取った。

とんでも無い人が転校してきたな、と。

容姿、態度は勿論、

力が。

強い。強かった。

あの島津達を、ものの数秒で倒してしまったあの力。

どの型にも当てはまらない、無手勝流の典型。

まさしく我流。それ故に強く、あの自信が出てくるのだろう。

考えながら、再び練習生を投げる。

気付けば、向かってくる人数が二人に増えている。父さんが増やしたのだろう。

その二人を“いなし”ながら、昔祖父が言っていた事を思い出す。

『強い者には必ず相応の力が引き寄せられる。故に強い者は苦勞し、

故に強い者は更に強さを得る事が出来る』

所々曖昧ではあるが、こんな様なことを言っていた記憶がある。

そして今日の美冬先輩の言った、『我有には気をつけなよ』の一言。祖父の言っていた事が、いやに現実味を帯びてきている。

昇一郎は強い。

それも相当に。

しかし、もし仮にあの三人と対峙した時、果たして勝てるかどうか。

バシィンッ

バシィンッ

二人を同時に床に叩きつけて、ふう、と一息を入れる。

二人も、もう向かってこなかった。床に倒れこんで、「はぁ・・・

はぁ・・・」と荒い息をしている。

少しやりすぎたかな・・・。

父さんに一言断りを入れて、道場から出る。

縁側から足を投げ出して、空を見た。

朧雲に月が霞んで見える。

さて、

と、僕は目を細めた。

厄介な事が起きなければ良いな。

そう思う。

出来れば巻き込まれたくないし。

僕は普通でいいし。

ただ、

ただ、

祖父はこうも言っていた。

『強い者には支えも必要』

と。

支え。

今日会っただけだが、昇一郎には何か色んなものを惹きつける魅力を感じた。

どうだろう。

日々、平凡過ぎてつまらなかった生活。

それがもしも一変するような事が起きたら。

楽しいかもしれない。とは、思った。

昇一郎なら、何かやってくれそうな気がする。

僕は空を見上げて、朧に霞む月を、細めた目で眺めた。

雲はまだ、開けそうになかったが。

六点五話 朧（後書き）

特に意味は無いです。

第七話 図書館でびっくり

「隆平、奴等ん所行くぞ」

教室に来るなり、昇一郎は僕にそう言った。

ちなみに、今は一時限目の真つ最中である。

つまりは遅刻してきた上で、昇一郎は僕に奴等（今の所誰の事かはわかってません）の所に案内しろ、と言っているのだ。
だから、

「はア・・・？」

僕の口からこの言葉が漏れても仕方が無いと思う。

仕様が無いと思う。 思います。

だって、ねえ？ そうでしょ？ 違う？ 僕違う？

言うでしょ？ 誰でも。

だから次の瞬間に昇一郎に

ガツンッ

と拳を頭に振り下ろされた事に、僕は納得がいつていなかった。

「痛あゝ・・・。 まだ痛いよ、頭・・・」

「るせえ。 下僕が俺に向かって顔をしこたま顰めて『はア・・・？』とかぬかした罰だ」

廊下を歩きながら、僕は小声で、昇一郎は普通の声で会話をする。

というか、昇一郎は地声が大きいから普通に喋っても廊下に声が響く。

今は授業中だから、できれば目立ちたくないのだけど。

というか、先生、何で僕が昇一郎に引っぱり出されたときに止めてくれなかったのですか・・・？

うつうつ・・・、と軽く泣きそうになりながらも、ちゃんと僕は昇一

郎の言う“奴等”の所に案内をした。

奴等、とは、勿論我有先輩達の事である。

ああ・・・、やだな・・・。僕も共犯と思われるんだろうか・・・。
ていうか、もう完全に周りが僕の事を“昇一郎の相方”と認知して
いる気がする・・・。

それに伴って、僕への周りの認識も変わっているのかも知れない。
そんな事を考えて、

「ふう・・・。」

僕は大きいため息をついた。

更に、

「隆平、授業中は静かにしろよ。非常識な奴だな」

こんな事を昇一郎に言われたからには、

「ふはあ・・・。」

もつと大きなため息だつてつきたくなるさ。
なるだろ？

なんて、そんな現実逃避を繰り返しているうちに、僕等は目的の場
所についた。

「・・・ここか？」

昇一郎は教室の扉の上に掛けてある部屋のプレートを見上げて言っ
た。

プレートにはこう記されている。

『図書室』

「・・・今つて授業中、じゃなかったか？」

昇一郎がそんな事を言う。

君がそれを言うか、とツツコミを入れたくなつたが、堪えて僕は「
そう」と頷いた。

「昨日も言つたように、生徒会の生徒には先生達もそうそう文句が
言えないんだ。特に我有先輩はこの学校に出資してる会社の社長の
息子だからね。しかも我有先輩は成績優秀だから、授業に出て無く

ても、文句のつけようがないんだ」

説明しながら、自分で改めて我有先輩の凄さを確認する。
凄さを確認しながら、それでも、何故だろう、

僕は少しワクワクしていたのかも知れない。

扉に伸ばした手が、意気揚々としている気がした。
ガラガラガラ・・・

無機質な音を立てて、扉が開いた。
そして、開けた視界の先。

居た。

部屋の奥。大きな長机に一人座って本を読んでいる我有先輩の姿が見えた。

本に目を落としたまま、扉を開いた事にも気付かぬかのように、こちらには見向きもしない。

そして何より、僕は感じていた。

この威圧感。

部屋の奥から、部屋の入り口まで届く、この威圧感に。

「昇一郎、どうす」

どうするの？という言葉は、完成する前に消えた。

昇一郎が居なかった。

視線をやった先に、居なかった。さっきまで隣にいたのに。

あれ？と室内に目をやると、いつの間にか昇一郎は我有先輩に向かって歩を進めていた。

「ちょ、ちよつと待ってよ！」

仕方なく、僕も後を追う形になった。

が、近づくにつれてより濃くなる威圧に、僕の心臓は鼓動が早くなる。

しかし当の我有先輩は、距離を詰めていく昇一郎に一瞥もくれないとなく、本の文章を目で追っている。

そんな間に、昇一郎は我有先輩の隣に立った。立って、言う。

「昨日はドウモ」

全然「どうも」って感じがしない声で言った。

が、先輩は気にしません、という感じで視線は本に。

「シカトですか、先輩？」

表情こそ笑っているが、全く笑えてない声だった。

と、これをどう思ったかは解らないが、我有先輩は本を閉じた。そして、「・・・チッ」

チッ・・・

チッ・・・？

舌打？

した。絶対。確実に。

だって顔が「何だコイツ、うぜえ」って顔してる。

そしてふう、と息を吐き、

「あのな」と口を開いた。

「あのな、俺は本読んでんだよ。見て解んねえか？今話し掛けるのはおかしくねえか？なあ？」

正論。正しい。間違いない。だから出よう。とつとこの部屋出ようよ昇一郎くん。

なんて僕の心の声なんて聞いてない昇一郎は、次の瞬間、

ドバンッ

机をぶツ叩いた。

瞬間、叩いた部分が盛大にひしゃげて、細かい屑が四散する。

「今日の放課後、体育館の裏に来てもらえんですかね、先輩？用はそれだけです」

血管の浮かんだ顔で、笑みを浮かべて昇一郎は言った。

僕は口から飛び出しかけたタマシイを必死で止めて、口の中に押し戻す。

我有先輩は何も言わずに、昇一郎を睨みつけていた。

しばらく二人は睨みあう形になっていたが、昇一郎が不意に踵を返し、

「行くぞ、隆平」

そう言つて出口に歩いていつてしまった。

「え、あ……」

もう昇一郎についていくしかなく、僕は小走りで後に付いた。

我有先輩に何かされるんじゃないか、と思つていたが、そんなことは無かった。

終始、我有先輩の威圧を背に受けていたが。

「何やってんのさ!？」

僕は叫んだ。授業中だが、もうそんな事は関係ない。

「びつくりだよ！ねえ！びつくりだよ！びつくり！解る!？びつくり！もう一回言つよ!？びつくりだよッ!」

「何回言うんだよ」

「五回だよ！何してんの!!いきなり喧嘩売るなんて聞いて無いよ!？」

「言つてねえからな」

何度か叫んでみたが、その都度昇一郎からは「どうでもいいじゃん」みたいな言葉しか帰つてこなかった。

これ以上何を言っても無駄だな、と、僕は「ふう……」と息を吐いた。

「ただ……」と、一つだけ疑問に思った事を最後に一個。

「さつき、先輩に掴みかかるかと思ったけど、よく放課後まで待とうと思ったね？」と。

さつき、昇一郎が机を叩いたとき、我有先輩に飛び掛るんじゃないかと思つてた。だから下手したら、僕が間に入ることになる事になるかも……。と。

が、そんな事なかった。

だから、よく踏みとどまつたなあ、と思つていた。
が、

「いや」

と、正一郎は首を横に振つた。

「本当はそのつもりだったんだ」と。

「あそこでぶツ叩いておこうと思つてた」

「……？じゃあ……」

「出来なかつたんだ。机をぶツ叩いた瞬間、途端に殺気が強くなつた。アイツだけのじゃねえ。多分あの双子の殺気だ」

「でも、あの部屋に漸樹先輩と鋼器先輩はいなかつたよ？」

「ああ。でも、どっかにはいたんだらうぜ。そして、俺が何かするようならスグに出て来れたんだらう。あの殺気を感じた瞬間、放課後、三人まとめての方が良いと判断したんだ」

廊下を歩きながら、昇一郎は言つた。

笑いながら、本当に楽しそうな顔をして。

「楽しみだ……」

呟くようなその声が、さつき僕が叫んだ、どの「びっくりだ！」よりも、冷たく廊下に響いていた。

第七話 図書館でびっくり（後書き）

ギャグ要素が極端に少ないです。というか皆無です。しかも暫くまた女性キャラが出ない雰囲気です。

でも頑張って進めますので、楽しんで頂ければ幸いです。

第八話 いざ

昇一郎がずっと起きていた。

昨日の彼の様子からは想像できないほど、黒板を凝視していた。

授業中も休み時間中も、ずっと黒板を見ていた。

ああ、いや……。と首を振る。

多分黒板を見ていたわけじゃないんだろう。

視線の先に偶然黒板があっただけで、別に黒板を見ているわけじゃない。

多分、その先。

我有先輩達との喧嘩を思い描いてたんじゃないかと思う。

我有先輩と戦うためのイメージを、ずっと思い描いていたのだと。

キンコンカンコン

帰りのHRも終わった。

昇一郎は結局動かなかった。だから掃除の時間はとても邪魔だったが、それでも誰も文句は言わなかった。

じゃ、なかった。言えなかった。

昇一郎の目が、とてつもなく怖かったからだ。それ程までに、イメージを鮮明にしたのだろうか。

が、ともあれ、もう放課後になってしまった。これから何が起こるのか知っている僕は、昇一郎を起さなければいけない。

今までになく　　といっても昨日会ったばかりだけど　　真剣

な眼差しの昇一郎に、話しかけるのが少しだけ躊躇われる。

が、このまま放っておくとこのまま日が暮れてしまいそうだ。だから、「昇一郎！行こう！」と、声を掛けた。

「時間だよ！？我有先輩と　　」

喧嘩するんでしょ！？という言葉は飲み込んだ。お風呂上りに飲む牛乳並に飲み込んだ。盛大に。

今教室の中でそれを叫ぶのはまずい。と、いうか、この学園内で叫ぶのはまずい。

何故ならこの学校で“生徒会”に喧嘩を売るといのはほぼ自殺行為だからだ。

自殺行為だからなんだ、と言われても困るけど、ともかく生徒会と関わるのはまずい。関わっていると知られるのもまずい。

別に僕が直接関わっているわけじゃないけど、周りの皆は昇一郎が僕と一番仲が良いと思っているから、めぐり巡って僕も“危ない奴”というレッテルを貼られかねない。ただでさえレッテルがもう僅か1cmの距離まで迫ってるのに！

「お話が、あるんでしょ？」

急遽、脳内思考回路をフル活動させて何とか路線変更成功。

ついでにギコチナイ笑顔も追加。

なんとも言えないカモフラージュに涙が溢れそうになるが、ぐっと堪えてみる。

四方八方から「怪しいな・・・」とか、「何か今言い換えただろ・・・」とか聞こえてくるが、涙とともに飲み込むことにする。牛乳並に。

「ほら、昇一郎！精神統一したいのは解るけど、もうそろそろ行かなくっちゃ！」

言うが、それでも昇一郎は静かに、一点を見つめている。

なにか思うところがあるのだろうか。

だとしたら一体どんな・・・。

と、そこまで考えて、
ん？

と、首をかしげた。こんなような場面を、前にも見た気がする。

たしかあの時は・・・。と思い出し、僕は昇一郎に近づいた。

「ンゴ・・・、グガ・・・」

小さく聞こえるその音はまさに、

I・B I・K I!!!

僕は大きく息を吸い込み、

「昇一郎おおおおおおお!!」
叫んでやった。

「ツハ!?何だ!?そうか!OK!よく解った!!」

「何が!?今日は何も説明して無いよ!今まで寝てたの!?ずっと!?今まで目を開けたまま!?せっかく僕がさつきカッコイイ事言ったのに!?イメージとか全然ねえやこの人!」

周りを気にせず僕は叫んだ。

周りの視線が体全体に突き刺さったが、それを解っていて敢えて大きな声で叫んでいた。

もしかしたら、これから起こる事への不安を、叫んでかき消したかったのかもしれない。

もしくは、

楽しみだったのかもしれない。

これから起こる事に、子どものように声を上げて喜んでいたのかもしれない。

もしくはその両方が。

そんな解らない気持ちを胸に、とにかく僕は寝ぼけまなこな昇一郎を体育館裏へ案内した。

放課後。体育館裏。

ここに、僕と昇一郎の二人だけが立っている。

普段なら部活生等の学生の姿がちらほら見られるはずだが、今日は

一人も見られない。

恐らく、我有先輩が手を回しているのだろうと思う。

体育館裏に近づかないように、今日一日の全部活を休止にしたのだろう。

その証拠に、ここから見えるグラウンドには人っ子一人見受けられない。

やはり、我有先輩はここに人を近づけないようにしている。

と、いう事は、だ。

我有先輩も意識している、という事だ。“喧嘩”を。

図書館ではその事は口にしなかったが、やはり我有先輩も察したのだろう。

まあ、机を目の前で四散する程殴られれば誰でもわかるかもしれないが。

ともあれ、我有先輩は“その気”である、という事だ。

今まだ、先輩は来ていない。

僕等は　　と言っても昇一郎がどうかは解らないが　　、高鳴る心臓を落착けながら、先輩が来るのを待った。

「待たせたな」

声がした。

声のほうを向くと、いつの間にそんなに接近していたのか、数歩向こうに我有先輩の姿があった。

その一步後ろには、やはり漸樹、鋼器先輩の姿も見える。

「ちょっと色々と時間がかかってな」

ニヤリ、と笑う我有先輩は、何かこれから起こることを楽しみにしているように見えた。

「双子先輩もつれてきたんスね。一人じゃ不安でしたか？」

「なに、こいつ等は心配性でな。俺を一人にしない。何かあったら、俺を守ってくれる頼もしいやつ等だ」

そう言う我有先輩の口調は、本当に二人を誇っているように感じた。と、共に、漸樹、鋼器先輩が我有先輩の前に立つ。

「お・・・、つと？なんスか？」

「回りくどいのは嫌いだ。どうせ、お前もそうだろう？」

言いながら我有先輩は踵を返して、向こうの方へ歩いていく。

「何だ？アンタは高みの見物かよ？」

「ああ」

こちらを振り返ることなく、我有先輩は言った。

「お前じゃたどり着けない高みでな」

「すぐにそこから引きずり降ろしてやるよ」

掛けられる言葉の間に、二人の“鬼”が立ちはだかる。

「いざ」と漸樹先輩。

「グフ・・・」と鋼器先輩。

そして、

「掛かって来い。即効で終わらせてやるよ、雑魚等が」

昇一郎は楽しそうに拳を鳴らした。

楽しそうに笑いながら、それでも目は厳しく二人を視線から外そうとしない。

僕はそんな三人を、遠くから見守ることしか出来そうに無かった。

第八話 いざ（後書き）

遅くなってしまいました。

すみません。

主人公がようやくまともな対決です。相変わらずギャグ要素が少ないですが、楽しんで頂ければ幸いです。

第九話 スピード型

「来いよ」

笑って、昇一郎が言った。

楽しんでるな、と、一目で解る顔だった。今にも声を上げて笑い出しそう。

別に昇一郎に答えたわけではないだろうが、ざっ……と地面を踏み、漸樹、鋼器先輩が二手に分かれる。

二手に、というか、昇一郎の前方に左右に分かれて立っている、という形。

「何だ、やっぱり二人いつぺんか？」

皮肉じみた声で昇一郎が笑う。さつきから見れば解ったろうに、敢えて挑発しているのか、それとも本当に解ってなかったのか。

「なに、我等双子、二人でやった方が何でも早く住むでな。それとも、何か。二人同時は怖いかな？」

布で顔下を隠しながら、漸樹先輩も返す。

布で隠れていて見えないが、こちらも皮肉じみた笑いを浮かべているのだろう。そう思う。

「グフ」

こちらは布で顔の上半分を隠している鋼器先輩。

この人は常に笑っているから、そこから感情を読み取ることが難しい。

ともかく解る事は、2対1では明らかに昇一郎が不利だという事。しかも向こうの出方が解らない以上、昇一郎側から仕掛けるのもまた難しい。

そんな事を考えながら、未だ睨みあったままの三人を見る。

と、昇一郎がこちらを見た。

「心配か、隆平。俺様が不利なんじゃないかと」

「いや、心配っていうか……」

「安心しろ。奴等の出方は解ってる」

自信満々な顔で、昇一郎は再び二人の方に見直った。

「いいか隆平。奴等の片方はスピード重視、そしてもう片方がパワー重視だ」

二人を指差して、したり顔で昇一郎は笑った。

あの自信は、並じゃない・・・。

「い、いつの間にそんな情報を・・・!?」

僕は唾を飲み込み、呟いた。そんな情報は、僕でも知らない。

と、昇一郎はしたり顔のまま、やはり自信満々に言つてのけた。

「漫画でこういうシチュエーションの場合、ほぼそうだろうッ!!」

「情報源漫画!？」

僕はさつき飲み込んだ唾が逆流するのを感じた。

ダメだ!コイツ馬鹿すぎる!!

うな垂れて、昇一郎が本当に勝てるのかとか云々考えるのを辞めた。
が、

「まあ、遠からずつてところだな・・・」

我有先輩は呟いた。

僕は高速で頭を上げる。

「遠からず!?!じゃあもう決まったも同然じゃないか!」

二人の容姿を見て、僕は叫んだ。

漸樹先輩は痩せ型。鋼器先輩は筋肉型。

昇一郎の言うとおりスピードとパワーだと言うなら、どちらがどっちかはもう予想がつく。

どうだ言ったとおりだろう!という輝く目線を送ってくる昇一郎はスルーして、僕は先輩達を見た。

二人は自分達の型を明かされたにも関わらず、眉一つ動かさない
。 といつても、鋼器先輩は眉が見えない。

それほど自信があるのだろうか?

そう思っていたとき、

「行け」

我有先輩の冷たい声がした。

瞬間、

ザッ

僕は見た。

地を蹴る先輩の速さを。

蹴った次の瞬間に、先輩は昇一郎の懐に入っていた。

そして次の瞬間には、

バキィッ

衝突音と共に、こちらに目線を送っていた昇一郎は僕の隣にまで吹っ飛んできていた。

「し、昇一郎!!」

壁にぶつかり、倒れこむ昇一郎。

しかし僕は、それとは違う方に目が言っていた。

昇一郎を吹っ飛ばした人。

その人を見る。

その人は笑みを浮べ、こちらを見ていた。

「鋼器・・・、先輩・・・」

あの一瞬で移動し、昇一郎を一瞬にして吹っ飛ばしたのは、僕の予

想を覆して鋼器先輩だった。

「まさか・・・、鋼器先輩がスピード型なんて・・・」

思わず呟いてしまう。想像とは全く違った展開になってしまった。

「驚いたか？」

と、声を掛けてきたのは体育館側にもたれかかっている我有先輩。

こちらを見る事なく、続けて言う。

「まあ、お前等はこいつ等の体格から色々と予想したらしいが、よく考えてみれば解る事だ」

まるで自分の事を自慢するかのように、得意げに先輩は語り始めた。

「はつきり言つて、長距離のスピードは明らかに漸樹の方が上だ。

が、短距離となればそれは違う。鋼器の爆発的な筋力で持つてすれば、先のそこで倒れてる奴との距離程度、ほんの一瞬で動ける。それは今見せたとおりだ。しかし、スピード型、という形容は違う。

パワーの部分と括りをつけるなら、それも当然鋼器の方が漸樹を遙かに上回る。つまり鋼器はスピード型兼パワー型と形容する方が適當だろうな」

話終えて、我有先輩はようやくこちらを見た。

いや、こちら、と言うより、僕を。

「それで？次はお前が続きをやるのか、隆平？」

目と目が交錯する。

瞬間、体が硬直して動かなくなった。蛇に睨まれた蛙。その形容がまさしく似合っている。

「おい、そういう話は俺をどうにかしてからにしてくれ」

と、不意な声は僕の横から。

そちらを見ると、いつの間に回復したのか、昇一郎がケロっ、とした顔で立っていた。

「やっぱ、コイツをつけたままじゃキツイわな」

言つて、昇一郎は何かを掲げた。

「・・・って、それ、パワーアングル!?」

それは島津の時にもつけていた、あの極重のパワーアングル。それをまとめて右手に持ち、昇一郎は左腕を回した。

「ああ軽い。隆平、これ持つてろ」

ひよい、と、昇一郎はパワーアングルを僕に向かって放った。

勿論、それはスルーして地面に落とす。こんなものをまともに受け止めたら、腕が外れてしまう。

ドズン、と音を立ててパワーアングルが落ちる。が、そんな事も気にせず、

「さて」

と、昇一郎は一步前に出る。

「長々と説明をありがとうセンパイ。でもな」

ビシッ、と我有センパイを指差す。

そして、

「俺はそんな事最初から気付いていた!!」

言い放った。

「嘘だ!絶対嘘だね!さっき漫画が云々って言ってた」

じゃない!という声は飲み込んだ。

いやに、昇一郎の顔が真剣だった。ギャグの雰囲気じゃなかった。

あれ・・・?嘘、じゃない・・・?

すこし困惑する僕なんか目もくれず、

「昨日、アンタ階段から落ちそうになった女を助けただろ」

アンタ、と昇一郎は鋼器先輩を指差した。

「グフ」頷く先輩。

「あの時、アンタ廊下に居たのに瞬間的に俺の横に移動した。だから解ったんだよ、アンタがスピード型だつてな」

「グフ!」

あゝ!なるほど!といった感じで、鋼器先輩は手を叩いた。

「なるほど?お前の分析力云々は理解した。だが、解ったからといって、ましてそんな錘を外したからといって、我等二人に適うと言

うのは違うだろう?」

言う漸樹先輩に、昇一郎は笑って見せた。

「ああ」と。

「だから、違うって事が違わないって事を証明してやるよ」と。

自分で何を言ってるのか解らなくなっただろう言葉を発して、昇一郎は構えた。

どうやら、まだ僕は帰れないらしいと感じ、僕は地面に落ちたパワーアングルが壊れたがばれるのが先延ばしになると安堵した。

第十話 形勢・・・！

壊れたパワーアングルを気にしつつ、僕は改めて昇一郎達の方を見た。

鋼器先輩の型が予想外のスピード、パワー型という事は解ったが、だからといって形勢が変わったかと言われればそうじゃない。

漸樹先輩がどんな攻撃をしてくるのかも解らないし、鋼器先輩の攻撃を攻略できるわけでもない。

それでも、と、僕は昇一郎の顔を見た。

昇一郎は楽しそうに笑っている。

依然として。始まってから、ずっと。

何でこの状況で笑っていられるのだろう。

思ったが、確かに昇一郎がパワーアングルを外した時の実力を、僕はあまり知らない。

島津の時も、瞬く間に倒されてしまっていたわけだから。

ともかく、と、僕は再び視線を全員の方へ戻した。

ザシッ

まさしく瞬間的に、鋼器先輩が地を蹴った。

蹴った動作も見切れない程の速度で、二歩三步を瞬間的に刻む。

後ろ！！

僕がそう判断した時には、昇一郎は鋼器先輩に後ろを取られていた。次の瞬間には腕を絡ますように、鋼器先輩が昇一郎を羽交い絞めにする。

「クッ・・・！！！」

あの鋼器先輩に掴まれたなら、並大抵の力じゃ外せないだろう。

昇一郎の顔が、ここにきて初めて歪んだ。

「ぐふふ・・・っ！」

鋼器先輩が不敵に笑い、

「弱いな」

漸樹先輩が昇一郎に近づいていく。

ゆっくりと、それでも確かに昇一郎との距離を詰めていき

スパパパパパパパアンツ

連打。

瞬く間に昇一郎の顔面から腹部にかけて、確認できない程の打突^{だつ}が繰り出された。

「ぐぶ・・・ッ！」

口の中が切れたのか、それとも内臓に痛手を負ったのか。昇一郎の口から少量ながら血が流れ出る。

「痛う・・・ッ」

鋼器先輩の羽交い絞めに体を任せるかのように、昇一郎の体から力が抜けてだらんとなる。

「まだまだ」

漸樹先輩は呟き、

スパパパパパパアンツ

再び連続の打突。

鞭で打ったかのようなその音は、普通の打突の“それ”では無い。

僕は先輩の打突をよく観察した。こんな事を冷静にしていって良いのか解らないけど、ともかく僕にはこれしかできなかった。

スパパパパアンツ

尚も繰り返される打突。

まるで撓^{しな}る鞭のように、先輩の打突は滑らかだった。

そんな僕の視線に気が付いたのか、我有先輩が再び口を開く。またも、自分の自慢をするかのように。

「気付いたか」と。

「漸樹の特徴はそのしなやか且つバネのような筋肉だ。一つの打突

にも、体全体の筋肉をフルに活用する。しかもその動作を迅速に！」
我有先輩はそう言い放った。

確かに、と、僕は力が抜け切ったかのような昇一郎を見て思う。

一つの打突にも幾つかの筋肉の可動を要する。

世間一般では、パンチを強くするために上腕三頭筋 ちからいじな 力瘤と

呼ばれる部 、上腕二頭筋 腕の裏の部 等、つまり

腕を鍛えれば良いと思われがちだが、それは違う。

単なる腕の伸縮という簡単な運動のみ、といった区切りの中で言うのなら、それでも問題は無い。

しかし、こと打突の強化となると、そうはいかない。

腕は勿論の事、肩から背面の筋肉、更には腰、足に至るまで、鍛えずに済む部はほぼ皆無と言っても過言ではない。

しかし、それも単に鍛えればよいというわけでもなく、その鍛えた筋肉を如何に上手く流れるように扱えるかが問題になってくる。

漸樹先輩は、その流れるような筋肉の動き、詰まるところのパワーの流れのコントロールが、常人に比べ遙かに上回っているという事だろう。

それ故の連打。

「解ったか？お前の力なんてのはそんなもんだ」

ため息混じりに、目を細めつつ我有先輩は言う。

「まあ、鋼器の突進を喰らって起き上がってきた時は確かに驚いたが、あれだけの連打を喰らってはもう暫く動けないだろう」

言いながら、体育館の壁に預けていた体を離す。

どやら帰ろうとしているらしかった。が、僕にはそれを止める事もできないし、そんな権利も無かった。

「く・・・ッ！」

自分の力の無さに歯噛みする。

が、

「ぐ、ぐふ!?」

鋼器先輩の方から、変化が見られた。

「どうした、鋼器？」

我有先輩がそちらを見る。僕も、そちらを見た。

「し、昇一郎・・・？」

俯いたままの昇一郎が、鋼器先輩の羽交い絞めを解こうとしている。
ぐ・・・、ぐぐ・・・

「ぐふ・・・！？」

何とか鋼器先輩は押さえつける。やはり、パワーでは鋼器先輩には
適わな

スル・・・

いと思っていたのに、昇一郎は鋼器先輩の羽交い絞めからい
とも容易く抜け出してしまった。

「！？」

呆気にとられる三人を、基、僕を含め四人を他所に、昇一郎は顔を
上げた。

「全くよお・・・」

と呟く顔は、

笑っている。

そして、

スパパパパパパパアンツ

「ツツ！！？」

漸樹先輩の顔面に向かって、さつき漸樹先輩が昇一郎に向けて放っ
ていた連打と同じ事をやってみせる。

「~~~~~~~~ツ！！」

後ろずさりながら、何とか打突を防ごうと前部をガードする漸樹先

輩。

が、

「遅^{おそ}え・・・」

その瞬間には、昇一郎は漸樹先輩の後ろに。

「！！」

この動きは、さっきの鋼器先輩のがしてみせたそれ。
そして次の瞬間には、

ドンッ

「かは・・・ッ！」

漸樹先輩を鋼器先輩に向けて突進で吹っ飛ばした。

これも、さっき鋼器先輩が昇一郎に向かってやって見せた動きだ。

「ぐふう・・・！？」

何とかそれを受け止めて、先輩達は体勢を立て直して昇一郎を見やる。

その表情からは、さっきまでの余裕は一切感じられない。

「全くよ・・・」

と、昇一郎が口を開く。

「デメエはセツカチだなあ？ああ？」と。

その言葉は、我有先輩に向けられていた。

そっちは見ていないが、恐らくそう。

「・・・！！」

我有先輩は依然と呆気に取られて、昇一郎を睨みつけている。

「さっきも言った通り、こいつ等をぶっ倒してお前をそこから引きずり降ろしてやる。待ってるこの野郎！！」

強く言い放つ昇一郎に、

「ハ・・・ッ！」

我有先輩も笑って体育館に再び体を預ける。

「さあ、仕切りなおしだぜ！！」

再び目に火を宿して、昇一郎は高く叫んだ。

第十話 形勢・・・！（後書き）

ギャグの要素が零です。しかも途中で筋肉談義みたいなのが入ります。が、気にせず、楽しんで頂ければ幸いです。

第十一話 本戦へ

はつきり言える。

漸樹先輩。

鋼器先輩。

この二人は、僕等の学校の生徒から見れば、もはや“伝説”とも言える存在だ。

カツアゲ集団を十秒掛からずに倒してみせた、とか、そういった武勇伝を挙げようと思ったたら一つや二つじゃきかないだろう。

そんな二人だ。

だから、エジソンとか、織田信長とか、そういった一般で知られる“偉人”達よりも、この二人のほうが僕等に見てみたらよっぽど偉人だった。

その実力は、さっきまでの戦闘を見ても明らかだった。明らかに、常人のそれを遥かに超えた力を見せていた。現に、その力の昇一郎も圧倒されていた。されていたはずだった。

なのに、

「ぐふ・・・ッ！」

「がは・・・ッ！」

どういうことだ？

二人は地面に倒れこみ、昇一郎を見上げている。

「ハッ！」

昇一郎も、それを笑いながら見下ろしていた。

さつき、鋼器先輩の羽交い絞めから逃れたとき、あそこから、昇一郎は二人を圧倒していた。

さつきやられていた人物とは、もはや別人にすら見えてくる。

漸樹先輩の連打を避け、鋼器先輩の瞬歩からの体当たりを受け止めて見せ、そしてその二人の技をそのまま返している。

しかもその二人の技のキレは、僕が見てもハッキリ解るほど凄いものだった。

恐らく、使っている本人達以上のもの。

元から持っていたのか、それとも今見てまねたのか。いずれにせよ、実力の差は歴然だった。

「ぐふっ・・・！」

鋼器先輩が立ち上がった。

構えを取る、と同時に、

ザンッ

地を蹴って瞬歩。昇一郎との距離を一瞬で縮める。

が、

「ハハッ！」

昇一郎に体当たりを決めて見せたと思った瞬間、昇一郎も瞬歩をし、鋼器先輩の横に移動している。

瞬歩と言うのは、瞬間的に足を使って移動する短距離移動に用いる移動法だ。

だから、双方が瞬歩を使え、更に片側に瞬歩を見極める洞察力さえあれば、瞬歩は先に使ったほうが明らかに不利になる。

今のように瞬歩を瞬歩で避けられ、さらに隙だらけの急所に打撃を食らわされる事になるのだ。

が、

今、昇一郎は鋼器先輩に攻撃を食らわせることはしなかった。

鋼器先輩の瞬歩からの体当たりをかわし、そのまま何もせずに先輩を見て笑っている。

「貴様・・・ッ！」

いつの間にか昇一郎の後ろに回り込んでいた漸樹先輩が、昇一郎に向かって連打を浴びせる。

しかし、先のような、鞭で何かを叩くような男が鳴る事は無く、やはりその連打も昇一郎は避けていた。

体当たり、連打、体当たり、連打。

その打撃の押収を、昇一郎は綺麗にかわしてのけた。

焦るでもなく、常に笑いを浮かべたまま。

余裕すら感じる昇一郎の顔に、僕は確信した。

無理だ。

と。

あの二人に昇一郎を倒すことは、無理だ。

勝てない。何をしても。

羽交い絞めにしようが、連打をあびせようが、瞬歩をしようが、あの二人では勝てない。

その事を、先輩達もわかっている気がした。

それを解らせるために、昇一郎はあえて攻撃を加える事無く、向こうの攻撃をかわしているのではないか。

そんな事さえ思う。

しかし、尚を二人は食い下がろうとしている。

避けられ、回り込まれ、それでも尚食い下がる。

伝説の双子が、ボロボロになっても食い下がっている。

「もういい」

口を開いたのは、我有先輩。

視線をそっちへやると、我有先輩はさっきまで体を預けていた体育館から体を離し、ただ昇一郎を睨みつけている。

「朝彦様・・・」

漸樹先輩と鋼器先輩も攻撃をやめ、昇一郎も我有先輩の方を見ている。

「悪かったな」

と、我有先輩が言う。

「アイツの実力を測り損ねた俺のミスだ」

「いえ・・・」

「ぐふ・・・」

漸樹、鋼器先輩が頭を下げ、体育館に歩いていく。

「何だ？もう終わりか？」

言いながら、昇一郎は笑ってみせる。

我有先輩はキツ、と昇一郎を睨みつける。

ハッキリ言っ、その睨みは怖い。そこら辺の「メンチ」とか、「ガン」とか、そういう形容じゃ収まらないような、「威圧」。

「安心しろ」

我有先輩は昇一郎に向き直る。

「今度は」

パシッ

「俺が相手してやる」

声は、昇一郎の後ろから。

「!？」

昇一郎ははじかれるように後ろを振り返る。

喋っている途中で、ノーモーションで昇一郎の後ろへ回り込んだ。

明らかに、鋼器先輩の瞬歩よりも早い。

「上、等だよ・・・！」

ニヤリ、と、昇一郎が笑う。

昇一郎VS我有先輩。

とうとう本戦へ。

僕は二人を見つめながら、直そうと思って弄ってた昇一郎のパワーアングルが壊れてしまっでどうしようかになって思っていました。

第十一話 本戦へ（後書き）

全話より一ヶ月かかってようやく更新できました。

ネットに&a m p ; # 3 2 3 6 3 ・ がりにくかったり色々あったりで遅くなってしまいました。

次回からは早い更新を心がけようと思います。

僕がこのサイトで初めて登校させていただいた『不思議な話』の身を少し書き換えましたので、お暇だったら目を通していただけると幸いです。

第十二話 力の抑制

緊迫感。という言葉がある。

空気が張り詰め、今にも何か起こりそうな状況を説明する語の事を言うのだが、

今まさに、今まさに僕はその中に居る。

空気の緊迫。

鬼気迫る、という言葉がここまで当てはまる状況も珍しい。

特に凄いのが我有先輩だ。一瞬の内に昇一郎の後ろに回りこみ、昇一郎は弾かれるようにして距離をとった。

今でも、昇一郎を睨みつけているのに、こっちにまで怒りが伝わってくる。

それほどまでの気迫。

「勝てるだろうか」

ふと、隣で声がした。

「へ？」

素っ頓狂な声を出してしまったが気にしない。

僕は声がしたほうを向いた。

「どう思う？」

そう言っただけのほうを見ていたのは、さっきまで昇一郎と拳を交えていた漸樹先輩だった。

「せ、先輩……」

さっきまで向こうに居たはずなのに、いつの間にかこっちに来たのだろっ。

隣には当然のように鋼器先輩が立っている。

「どう思う、って……」

「別に深く考えなくてもいい。単純に、どっちが優勢に見える」

僕の方は見ず、未だ向かい会う二人の方を見つめて、漸樹先輩は問うた。

僕は考える。

「さっきの瞬歩。あれは明らかに鋼器先輩よりも早かったです」
当然だ。と、漸樹先輩は頷く。

「だけど、昇一郎も完全に反応できなかったわけじゃない」
僕は強く、昇一郎の方を見て言い切った。

「後ろには回られたものの、一応後ろには反応していました。だから、戦っている最中にその速さに慣れさえすれば、決して惨敗という結果にはならないはずです」

だろう、と思う。強く言ってみたものの、あくまでもこれは僕の予想だ。慣れさえすれば、とは言ったが、慣れる前に叩かれる可能性だって全く否定できない。

寧ろその確立の方が……。

「本当にそう思うか……？」

漸樹先輩が呟くように言った。

「はい」と、僕は答えた。

全然、確信は無い。ハツタリだ。僕がハツタリを言っても何の意味も無いけど。

「そうか」と、漸樹先輩は呟いた。

「それじゃあ……」と。

「それじゃあその予想は、恐らく覆るだろう」

ザッ

漸樹先輩が話し終えるか否かの刹那。

にらみ合っていたはずの我有先輩と昇一郎が同時に地を蹴った。

「二人とも同じタイミングを見計らってたんだ！」

思わず解説してしまう。

スパパパパパパパアンッ

同時に繰り出した連打が交錯する。同じ手数がぶつかり合って、その音はさっきのような一方的な連打よりも遥かに大きい。

世間一般で言われる「目にも止まらない速さ」、とはこういうことなのだろうと実感する。

「見てみる」

漸樹先輩が、ふと二人の方へと指をさす。

「・・・？」

スパパパパパパパ・・・

依然として、二人は連打を打ち続けている。

「何ですか？」

僕はその光景を見続ける。が、別に変化など
・・・・・・？

ない・・・、か・・・？

否。

若干。

本当に、若干。

片側が徐々に、それでも確かに押し始めている。

「何で・・・？」

押しているのは

「何者だ、アイツは」

漸樹先輩が呟く。

昇一郎、だった。

「ハッ！ハハハハッ！！」

「ちいッ！」

連打が交錯している。

その内、徐々に我有先輩の手数が少なくなっている。当然だ。人間というものにはスタミナというものがある。

パンチというものは無呼吸運動の類に別けられるが、普通あれほどの連打を続けていれば呼吸による酸素の吸入を体が欲し、体に乳酸が溜まって体の動きは鈍くなるものだ。

それがどうだ。

徐々に手数が減っている先輩に対して、昇一郎の手数は徐々に上がっていつている。

「どういう事・・・？有り得ない・・・」

思わず口にもれる。そう。まさしく“有り得ない”。

体の創りを完全に無視している。

しかし、現に僕の目の前で展開されている光景が“そう”なのだから、それを事実として受け止める意外、僕達にはできない。

「クソがアツ！」

ザンツ

我有先輩が地を蹴った。

回り込まれるか！？

僕は視線を昇一郎の後ろに持っていた。

が、我有先輩の姿はそこには現れず、

「え？」

逆に、ただ昇一郎から距離をとるために後退した姿が見えるだけだった。

「ハア・・・、ハア・・・、ハア・・・」

我有先輩は息を荒げて、呼吸を何とか落ち着かせようとしている。

それを見て、そういえば喧嘩開始時から浮かべたままである笑みを浮かべている。

『強い』

もうこれはどう見ても揺るがない事実らしい。

昇一郎は、強い。確かに、強い。

「やはりか・・・」

漸樹先輩がボソリと呟いた。

「奴は、恐らく力を隠していたのだろう。我等双子で奴に対峙した時から、ずっと」

顔の下半分は布で覆われているが、恐らくその下は様々な感情で歪んでいる事だろう。

「そして・・・」

と、漸樹先輩は拳を握った。

「そして・・・、恐らく今も、力を抑え続けている・・・」

と、漸樹先輩は昇一郎をにらみつけた。

今尚、力を抑えている・・・？

一瞬疑問思ったが、もうここまできたらその全てを否定することは出来ない。

「クソがアツ！」

今一度、我有先輩が地を蹴って昇一郎との距離を詰める。

「おおおおアアあああッ！！」

スパパパパパパパパアンツ

懇親の連打を、昇一郎に向けて放っていく。
が、

ド・・・ッ

重い音が低く響いた。

「が・・・あうあ・・・」

昇一郎の拳が、我有先輩の水月みそあちに深く入っていた。

力が抜けるかのように、我有先輩は膝から崩れ落ち、昇一郎の足元に倒れこんだ。

「う・・・ああ・・・ッ」

呻く声が、静かに悲しく聞こえてくる。

勝った。

もうこれは完全な勝利だ。我有先輩はもう戦えない。

もう終わりだ。

そう思い、僕は半壊したパワーアングルを持って昇一郎の方へ歩いて行こうとした。

が、
出来なかった。

見えたからだ。

昇一郎が、高々と拳を振り上げているのが。
その拳は勝利を誇っているのとは違って、
明らかに、我有先輩に止めを刺そうとしていて

「昇一郎！」

叫んだ僕の声が届いていたかは解らないが、
拳は振り下ろされて

第十二話 力の抑制（後書き）

隆平が解説キャラになりました。

下僕から解説キャラに格上げです。

下がってるんじゃないか。

ともかく、楽しんで頂ければ幸いです。

第十三話 情けとチャーム

「昇一郎オッ！」

叫んだ僕の声が終わるかどうかの瞬間に、昇一郎の拳は我有先輩に向かつて振り下ろされ

ドガッ

「ぐ……っ！」

「がは……ッ！」

我有先輩に当たる前に、漸樹、鋼器先輩によってそれはさえぎられた。

腕を交差させて、昇一郎の拳を受け止めた。

が、二人掛りで止めたのにも関わらず、二人共全く表情に余裕は無い。

交差させていた腕を下ろし、だらんとさせている。恐らく腕が上がらなくなったのだろう。

が、構わず昇一郎は第二撃目のために腕を再び振り上げている。

「貴様ア……ッ」

漸樹先輩が昇一郎を睨みつける。

「何故……！何故そこまでする……！？」と。

振り絞るようにして、言った。

「退け」

漸樹先輩の問いに答える事無く、簡潔に昇一郎は言った。

「退かぬ」

と、一歩も退く事無く漸樹先輩も言う。

退けない。

退けるわけが無い。

退けば、我有先輩に危害が及ぶ。

もう我有先輩は昇一郎の一撃を、一発だって耐えられる状態じゃない。間違いない、次の一発で我有先輩の意識は途絶える。

それは昇一郎だつて解っているはずだ。絶対に。

そもそも、昇一郎が先輩達を追い込む必要は全くない。

自分の力を誇示できればいいはずだ。転校してきて間もないのに、先輩達に恨みを持つているなんてことは無いのだから。

それなのに……。

昇一郎は、振り上げた拳を更に固めた。

もう、鋼器先輩も漸樹先輩も止められない。止められる事なく、誰かの体にノーガードの状態で昇一郎のパンチが当たるだろう。

「退けよ」

もう一度、昇一郎は言った。

が、

「退かぬ」

「ぐふっ！」

答えは変わらない。

鋼器先輩と漸樹先輩は、体を張つてでも我有先輩を助けるつもりだ。

「そうかよ……」

昇一郎の声は冷たかった。

寒気がするほど。

だから、

仕方が無かった。

ブンッ

風を唸らせて振り下ろされる昇一郎の拳。

それを、

誰が止められる？

今、この状態で。

僕しか居ないだろう……？

気が付くと駆け出して、

ミシミシミシイ・・・ッ

気が付くと僕は昇一郎の拳を受け止めていた。

「ッぐう・・・ッ！」

体中が軋む。

今までに受けたことのないような、呆れるほど重い一撃だった。砂の詰まった袋を高い場所から投げ落とされたかのような衝撃。気を張っていないと、今にもこの場に倒れこみそうだが、

僕は耐えなきやいけなかった。

耐えて、

「昇一郎オオッ！」

昇一郎を強くにらみつけた。

「何で、ここまでする必要があるんだよ・・・ッ!？」

受け止めた昇一郎の拳を振り払って、僕は昇一郎に詰め寄った。

「何だ、隆平。お前いつからそっちの味方になったんだ・・・?」

「質問に答えるッ！」

僕は昇一郎を見上げて、強く言い放った。

昇一郎は僕を見下ろしたまま、僕をも睨んでいる。

それでも、退けない。

「我有先輩はもう動けないだろ!？もう無理なのは見ても解る事

」

「何でそんな事が言える?」

僕の声を遮って、昇一郎は言った。

振り上げていた拳を下ろして、僕を見据える。

僕はその気迫に押されて、

「何で・・・、って・・・」

口籠ってしまった。

構わず、昇一郎は言う。

「ソイツが、自分から負けを認めたんなら解る。それは俺の勝ちで終わりだろうよ。現に、さっきの戦いは二人が身を引いて、ソイツが出てきたから終わったんだからな」

解るか？と、昇一郎は言った。

解る。確かに。理は通っている。が、

「それでも・・・！」

やりすぎだ。と、言おうとした。しかし、

「やりすぎだ、とか、そんな事は言わせねえ」

昇一郎は僕の言葉を遮って、続けて言う。

「あくまでも、本人が“負けを認める”まで、その戦いは終わらねえ。逆に言えば、どんなにボコボコにされても、“負け”を本人が認めないのなら、それは“負け”じゃねえって事だ。ソイツはまだ、一言も自分から“負け”を宣言してねえ。そうだろ？それを勝手にテメエ等がソイツを“負け”にしてんだ。それはどうなんだよ？」

落ち着いた口調で、昇一郎は言った。
決して怒鳴っているわけでもないが、僕を含め、誰も反論する事が出来なかった。

確かにそう。

我有先輩は負けを認めては居ない。だから、我有先輩は負けては居ない。

そして逆に、昇一郎はまだ“勝って”はいない。

「その通りだ・・・」

ふいに、声がした。

後ろからだ。

振り返ると、我有先輩が立ち上がって昇一郎を睨んでいた。

「テメエ等、退いてろ・・・。俺は、まだ負けてねえ・・・。俺はソイツに、“負けた”と自分で認めてねえ・・・！」

言つて、先輩は僕と漸樹先輩と鋼器先輩を腕で制した。

止めようと思つた。多分先輩達も。

それでも僕等は何もいえないまま、我有先輩に促されるままに道を開けてしまふ。

「さあ、決着だ・・・！」

昇一郎の目の前まで進んで、我有先輩は笑つた。

「ああ・・・！」

昇一郎もまた笑つた。

断つておくが、我有先輩はもう昇一郎の攻撃を避ける力も、受け止める力も残つちやいない。

が、我有先輩が“負け”を認めるまで、僕達はそれを見届ける事しかできなかった。

これを止めるのは、我有先輩に対しての侮辱になってしまうから。

「行くぜ・・・！」

昇一郎が拳を固めた。

「来い・・・ッ！」

固めた拳を、振り上げる。

振り上げて、

バオツ

風が唸り振り下ろされ

キンコーンカーンコーン

なか・・・、つた・・・。

いや、振り下ろされはしたが、我有先輩の顔に当たる直前に止まっていた。

止められたわけでもない。昇一郎の体に異変が起きたわけでもなさそうだ。

つまり、拳は“昇一郎の意思で止められていた”。

「な・・・、何のつもりだッ！」

我有先輩が声を張り上げる。

が、昇一郎は振り下ろした拳を収めて、首を振った。

「残念」と。

「残念、“帰りのチャイム”が鳴っちまった」

確かに、さつきチャイムは鳴った。が、別にチャイムが鳴ったら帰る、とか、そんなルールは決めてなかった。

「だから何だつて」

「じゃあな」

「あ・・・ッ!？」

我有先輩の言葉を遮って、そのまま踵を返して歩いていくとする。

「帰るぞ隆平」

「え、あ・・・」

「ま、待て！」

言って、我有先輩は昇一郎の腕を掴んだ。

僕等はそのまま呆然と立ち尽くしてしまう。

「テメエ・・・ッ！俺に情けを掛けるのか!？」

漫画とかでよく聞く言葉を目の前で聞いてしまった。

が、昇一郎は振り返って、ニヤリ、と笑った。

さつきまでの楽しむような笑いではない、もの凄く「悪」な顔。

が、それも真の「悪」というわけではなくて・・・、よく解らないが、“やわらかい”「悪」の顔をしていた。

そして、

「そうだ」

と、言った。

「あ・・・？」

「情けを掛けてんだよ。お前があまりにも弱すぎるからな」

それだけ言って、再び踵を返して歩き始めた。

「テメエ、人をなめるのもいい加減に・・・、ぐ・・・ッ!」

昇一郎を追いかけようとして、我有先輩は膝をついた。

「朝彦様！」

「ぐふっ！」

漸樹先輩と銅器先輩が駆け寄って、我有先輩を抱える。

「クソがアツ！ テメエ！ 覚えてろ！ 絶対^{ぜって}え テメエ もう一回勝負して殺してやるからなッ！ 覚えてろクソ野郎オツ！」

後ろから、我有先輩の怒声が絶え間なく聞こえてきた。

が、ソレに殺気が籠っていないのは、背中越しにも解った。

第十三話 情けとチャーム（後書き）

ギャグ要素零ですが、次話辺りから再び（？）ギャグ要素増やしていきたいと思います。

楽しんで頂ければ幸いです。

第十四話 強さ

「痛たたたたた・・・」

僕は頭にできた“こぶ”を撫でながら、沈む日の中帰路についていた。

頭に出来た“こぶ”の原因は、誰あろう、昇一郎である。

『ああ、そうだ。おい隆平。俺のパワーアングル』

そう言つて、彼は僕に向かって手を差し伸べた。

だから僕は、

『あ、う、うん・・・』

と、壊れたパワーアングルを引きずるように差し出した。そこまでどうやって僕がパワーアングルを運んだかは気にしないで欲しい。まあ、後は説明しなくてもわかるだろう。

僕は容赦なく殴られた。

「手加減を知らないんだから・・・」

ため息混じりに呟いて、

・・・ああ、否^{いや}。

と頭を振った。

あれで、手加減をしているのだろう。

そう思う。

先の一戦^{さつき}。あれを見ていれば、そう思えてくる。

あの一戦は本当に凄かった。

鋼器先輩の瞬歩。漸樹先輩の連撃。

それ等を見事に返して、さらには、余力を残して我有先輩をも倒してしまった。

我有先輩には、挑発もしていたし。

昇一郎は並じゃない。

それは島津の時から思っていた事だが、今日で確かなものに変わった。

それを裏付けるかのように、昇一郎はさっき別れ際、こんな事を言っていた。

僕が、頭を抑えながら「誰にあの体術を習ったの？」と聞いたとき、彼は、

『俺は誰にも喧嘩の方法を習っちゃいねえ』と言った。

そして更に、『俺は自力でここまで這い上がった』とも。

それだけ言って、昇一郎は帰っていった。壊れたパワーアングルを持って。

とは言っても、だ。

人間が“0”から何かをするのは難しいことだ。

武術とは“何か”を基盤として、そこに得た情報をプラスしていつて構成されるもの。

つまり昇一郎の“何か”を我流だとするならば、さっきの瞬歩と連撃は、後々からの情報と我流からなっているという事になる。

前に瞬歩や連撃を使える人と戦ったことがあるのだろうか。

本来ならそう考えるのが妥当だが、それならば相手の出方が解る前に先手を打とうとするだろうし、わざわざ相手の出方を見るような真似はしない。

だから、僕は逆に考えてみた。

何故わざわざ相手の攻撃を食らうような真似をしたのか。

それは相手の動きを真似て、自分のものにするからじゃないか。

ハッキリ言ってそんな事は普通で来たもんじゃない。というか、普通はやらない。

やるとするならば、自分の力によほどの自信がある人だけだろう。

自分は負けない。相手の技を真似し、更にそれを使いこなせる。という自負に裏付けられた戦闘パターン。

並外れた格闘センス、運動神経が無ければ出来得ない事だ。

昇一郎には、それがあつた。

現に、一度真似てからは、その技に慣れるかのように相手を徐々に
圧していた。

そして結果、漸樹先輩、鋼器先輩を下して、さらには二人の実力を
上回る我有先輩すらも下して見せた。

“生徒会”の一郭を潰したのだ。
が、

昇一郎が思い違いをしていないだろうか。と、少し不安になる。

我有先輩はハッキリ言って、生徒会の中でも下位の人だ。一郭とい
つても、端っこが欠けた程度にしか生徒会は思っていない。

もし仮に昇一郎がこの一戦で天狗になるような事があれば、我有先
輩を含め、生徒会はすぐにでも昇一郎を潰しにかかるだろう。

そして、“予備軍”も。

昇一郎が思っている以上に、あの学校には敵が多い。

その中から昇一郎が這い上がって、一番を取れるのか。

それは難しい事だった。

それでも、

何故だろう。

昇一郎には、それを期待させる何かがあった。

だからこそ、と、僕は思う。

いつか僕とも。

いや、と、僕は再び頭を振った。

今はいい。

今は、見ていよう。そう思う。

昇一郎がどこまでいけるか。そして、これからどうなるか。

『強い者には必ず相応の力が引き寄せられる。故に強い者は苦勞し、
故に強い者は更に強さを得る事が出来る』

祖父の言っていたことを、今再び思い出す。

昇一郎の苦勞とは何だろう。そして、昇一郎はこれからも強くなつていくのだろうか。

『強い者には支えも必要』

強い者の支え。

支え。その支えは僕なのか。僕は彼を支えきれるのか。

しかしいつか、時が経てば彼も知ることになるのだ。

ああ、と、空を見上げる。日は沈みかけて、空は赤く染まっている。

平凡だった僕の暮らしは、いつしか“過去”に変わっていった。

第十五話 点数表

中間テスト、というものがある。

期末テスト前にある、これも成績にかかわってくる大切なテストだ。今回行われるテストは、

国語（主に格闘技について）、

数学（格闘技について）、

科学（格闘技について）、

歴史（格闘技の歴史）、

英語（主に格闘技の）。

基本格闘技で埋め尽くされたテスト内容。

これが国で認められているというのだから驚きだ。

あと因みに、実技のテストも設けられる。

筆記に一日を費やし、実技に二日を。

合計三日をかけ、中間テストは終了する。

で、テストは終わった。

筆記も実技も終わった。

テストが帰ってくるのは、三日目の実技が終わってから土、日を挟んで三日目。

つまりは、今日だ。

今日、テストが帰ってくる。

僕等一年生にとっては、クラスメイトの知力がどの程度であるのかを知る初めての機会だ。

特に気になるのは、勿論昇一郎の点数だ。

果たして昇一郎の頭は何並なのか。

僕は朝登校してくる時から楽しみにしていたのだ。

「デメエ！何だコリヤ！？」

「ちょ！やめてよ昇一郎！返して！」

ドダダダダダダ・・・

一時限目が終わった瞬間、僕は神速のごとき速さで、昇一郎に点数が表記された紙を盗まれた。

僕は逃げている昇一郎を追っているわけだが、所々で瞬歩を駆使する昇一郎とは、差が開く一方だ。

「昇一郎！こんな所でそんな高等テクニクを駆使しないで

」

「てめえ！国語89点、数学100点、科学91点、歴史82点、英語97点、って、このワケのワカンネエ点数はなんだア！？」

「やめて！点数を読上げないで！何してんのさ！？早く返して今すぐ返して！駄目！破つちや駄目！かえってお母さんに見せるんだから！カエシテーツ！」

「ゼエ・・・、ハア・・・」

肩で息を整えて、なんとか奪還（といっても、昇一郎が飽きて返したただけだ）に成功した点数表を握り締める。

「隆平、テメエ実は頭いいんだな？」

腕組をした態勢で、なんか凄い形相で昇一郎は言った。

「そ、そんな事ないよ・・・。普通だよ、普通」

もう盗まれないように、と、シュバア！と風を切ってポケットの中に紙を突っ込んで、僕は横に首を振った。

それよりも、と。

「それよりも、昇一郎はどうだったのさ？」

「あん？俺？」

何とか話題の切り替えには成功。

昇一郎はあからさまに顔をゆがめている。

「別に、俺のはいいだろ・・・」

「良くはないですよ！人の点数才オヤケに公開しておいて！ほら！見せてよ！早く！こっちによしなさい！ミセナサイって！」

誰が見せるか！と、昇一郎は一步後退した。

そんな昇一郎を見て、

今ならいける。

僕は確信した。

今なら、昇一郎からあの点数表を奪取できると。

なぜなら今昇一郎は体に錘をつけているはずだから。その状態の昇一郎を、僕は前に一回制した事もある（第2話参照）。

だから、奪取するなら今！別にそんなに見たいわけじゃないけど、ここまできたら意地だ！

「力ずくでも取りに行くからね！」

僕は先に宣言した。

「ああ！？テメエ俺から取れるとも思ってた

」

今だ！と、僕は床を蹴った。

昇一郎が言い終わる前。喋っている間は誰しも油断しているものだ。そこを狙った。

素早く昇一郎の右腕を掴む。そこから背中側に腕を回して間接を極めたい。

そうすれば、さしもの昇一郎でも簡単には身動きは取れないはずだ。

一応僕は免許皆伝だし。

「シッ！」

腕を取ったまま、滑り込むようにして昇一郎の背中に回りこむ。

ここで上手く捻り上げれば！

僕は昇一郎の腕を掴む手に力を込め

「あれッ！？」

れなかった。

ぐぐ・・・

昇一郎の腕が、動かない。

寸分も、動かない。

「くつくつく・・・」

甘えぜ……。昇一郎は笑った。

まさか……。?

「この俺が、“こんな事”も予想していなかったとも思ってたのか?」

まさか……。、

「俺はコレでも用意周到なんだぜ?」

錘を!?

外していたのか、と頭で理解した瞬間には、僕の足は床から離れていた。

「あ、あえッ!?!」

昇一郎の腕に掴まったまま、言わば、“父親の腕に掴まったままブライン”てなる子供”みたいな構図になってしまう。

「くかかッ!」

腕を上に掲げるような体勢にまで、昇一郎は腕を伸ばした。

そして、

フオンッ

風が唸った。

「わああッ!?!」

同時に、僕の見ていた風景が一気に上に流れていく。

昇一郎が腕を振り下ろしたのだ。

ジェットコースターよろしく、床がとんでもないスピードで近づいてくる。

「くうッ!」

何とか体勢を立て直して、片足で着地してそのまま一足飛びで後ろに飛び退く。

なんとか着地は出来たものの、全体重を受け流す事はできず、片足にかなりの負荷が掛かった。

「ハッ、耐えやがったか!」

昇一郎は構えなおす。

「流石！」

僕は笑って見せた。が、

笑ってはいるが、もう余裕は無い。次の攻撃は確実に避けられない。こんな、実践さながらの攻防の目的が、点数表の奪還だと言っただから泣けてくる。

もういい加減諦めようか。

こんな事で怪我したら馬鹿馬鹿しいだけだ。

そんな事を考えていたから、

「国語（68点）、数学（72点）……。至って普通だな」

え？

後ろから声がしたとき、少なからずびつくりした。

「この声は・・・」

僕が振り返った先、

そこには、髪の長い“大和撫子”の体現が立っていた。

「美冬先輩！」

やあ、と、先輩は軽く手をあげた。

その上げた手には、一枚の紙が握られている。

「うをいッ！それ俺の点数表ッッ！！」

昇一郎が声を上げた。

それに対し、美冬先輩は冷静に、

「普通こういう場合は、点数が異様に高いか低いかって、相場は決まってるんだがな」

言いながら、首を振って僕に点数表を渡す。

「ほら」と美冬先輩。

「あ、どうも・・・」と僕。

「どうもじゃねえよッ！」と昇一郎。
バンッ

と、昇一郎のほうで音がしたと思ったら、僕の手元から紙は消えていた。

昇一郎が瞬歩で移動して、僕の手元から紙を奪い返していたのだ。

「あー!」

結局全く見れなかった。解るのは、先輩が言った国語、数学の点数。何とも絡みにくい点数だった。先輩の言ったとおり、普通こういう場合は点数は極端に高いか低いかしないと成り立たない。

だからまあ、見なくても良かったかと思う。

「で?」と、不意に昇一郎が言った。

紙をビリビリに破りながら、美冬先輩をにらみつける。

「何の用なんだ?」

と、口から発せられる声はとても冷たい。

「そんな邪険にしないでくれよ。別に君達に喧嘩を売りに来たわけじゃないんだ」

そう言つて、美冬先輩は笑った。

楽しそうに。

これが、きつかけで、僕と昇一郎は出会う事になる。

ここから先、僕等とかかわってくる事になる、“転校生”に。

第十五話 点数表（後書き）

最近パソコンがウィルスにやられてしまいました。

自分のパソコンでは小説の投稿どころか保存すらできません。

報告としては、一話〳八話までの本文の多少の修正を行いました。

それから、僕が書いた〴〵とっておきの唄〴〵という、B u m p o f

C h i c k e n というバンドの歌がモチーフの小説が読者の方の
納得のいかない内容であったようなので削除しておきました。あの
小説を読んで気分を害された方には、深くお詫び申し上げます。

ともあれ、この作品は楽しんでいただければ幸いです。

第十六話 教室へ

『ある“子”と友達になつてもらいたいんだ』
と、美冬先輩は言つた。

一時間目が終わつた休み時間の時だ。

『あん・・・？』

眉間に皺を寄せて睨みをキかせる昇一郎を事も無げにスルーして、先輩は続ける。

『その子も君と同じ転校生なんだ』と。

先輩が言つには、昇一郎が転校してきたあの日、同じ学年の1・Hにも転校生が来ていた、との事。

『ああ・・・、確かそんな事先生が言つてたような・・・』
確かにそんな記憶がある。

昇一郎のイメージが強すぎて、そっちの方は全く気にかけていなかった。というかそんな余裕無かつたし。

しかし、一つ疑問がある。

『何で・・・』と。

『何で、先輩がそんな事を？』

第一、別に僕等が関わらなくちゃいけない事じゃない。

そもそも、美冬先輩は最近おかしい。

昇一郎が転校してきてからこつち、一度も道場の稽古に来ていないし、校内でも僕から先輩を見かけることがなくなつた。

それに、昇一郎が転校してきたあの日、我有先輩との一件をあたかも予想していたかのような一言も気になる。

『先輩は一体何を』

『そんなに難しい事じゃないさ』

僕の言葉を遮つて、美冬先輩は首を振つた。

目を細めて、ニコリと笑う。

そして昇一郎を指差して、

『君は転校生』

『あ？』

昇一郎は更に眉を顰める。

『そして、彼も転校生』

そう言つて、今度は1-Hがある方向を指差す。“彼”というのは、その転校生の事だろう。

そうしてこっちに見直つて、

『転校生同士、気が合うんじゃないか。そう思っただけさ』

先輩は笑つた。

そして今。

「あゝ・・・」

僕達は1-Hに向かつている。

「メンドクセエ・・・」

何で俺が・・・。

昇一郎はさつきから僕の隣でブツブツブツと呟いている。

「何で、つて、最終的に承諾したのは昇一郎だろう？」

僕はため息混じりで肩を降ろす。

今、食事を終えた昼休み。

『今すぐじゃなくてもいいさ』との事だったから、僕等は自由時間の長いこの時間を選んでいた、つて言うわけじゃなくて本当は昇一郎が他の休み時間中ずつと寝てて飯時に丁度おきたからじゃあ行こうかつて事で今になつただけです本当は。

ともかく、と、僕は顔を上げた。

渡り廊下を渡つて、隣の棟へ渡る。そして角を曲がつて目線を少し上に上げれば、

「ほら、ここだよ」

目の前に“1-H”と書かれたプレートが現れた。

1-H。比較的静かな人間が集まっているクラス。島津のような人

間は一人も居らず、物静かなクラスとして有名だ。

ただ、今回の転校生がどんな人間なのかで、今後のこのクラスの行方は変わっていくだろう。

例えば、昇一郎のような人間が入ってきていれば、1-Hが1-Aのようになる事は間違いない。

「メンドクセエ・・・」

と、隣で昇一郎が呟く。

「だから」と。

「とつとと終わらせて、とつとと戻ろう、ぜ！」

“ぜ！”と同時に、昇一郎はガラガラガラ！と威勢良く扉を開け放った。

ちよいッ！と思ったが、もう開いてしまったものは仕方が無い。

一斉に集まる「何だアイツ“等”？」という目線に背を向けつつ、

僕はゆっくりと昇一郎の影に身を隠した。

「で？」

と、昇一郎は教室内を見回した。

「居そう？」

僕は小さい声で、昇一郎の後ろから聞いた。

「ソイツの顔がどんななのかも解らねえのに、居るか居ねえかなんて解るかよ」

「だったら聞いてよ。クラスの人の誰かに」

「ああ？俺がか？」

「承諾したのか君なんだから、当然だろ？そもそも僕はついてこなくてよかったんだから」

こそこそと開いた扉の前で立ち尽くしている二人に、視線はこれでもかという程集まっている。

「ああ、もうほら！早く聞いて！」

「わあっただよ・・・」

「たたく・・・と頭を掻きながら、

「オイ、その teme」

昇一郎は一番手前にいた丸坊主の男の子を手招きした。

「ええっ!? あ、え? 自分ですか!？」

昇一郎の形に気圧^{なり}されてか、その子は何故か敬語で恐る恐る近寄ってきた。

早速、昇一郎が聞く。

「なあ、このクラスに転校生のヤロウ居るだろ? どこだ?」

言つて、教室内をキョロキョロと見回す。

「え、あ、今居ないんですけど・・・」

スミマセン、と男の子は頭を下げた。

「で? 今ソイツはどこに居るんだ?」

「・・・確か体育館裏に・・・」

「体育館裏?」

どうしてまた・・・。

と思いはしたが、それ以上はその男の子もしらないようだった。

それじゃあ、

「行こうか、体育館裏」

はぁ・・・

溜息をつきながらも、僕達は体育館裏に向かった。

第十六話 教室へ（後書き）

長い間放置してしまいました。
申し訳ありません。

第十七話 謎 ニット帽

体育館裏。

一週間前に昇一郎と我有先輩達が喧嘩をした場所。

僕達はそこに、転校生を探しに赴くことになった。
だから、

バキッ

“こんな光景”を見る事になるとは、思っていなかった。

「先輩ッ！」

僕は思わず叫んでいた。

昇一郎は気付くと駆け出していた。

駆けて、“血まみれで倒れている我有先輩達”を抱き起こす。

「大丈夫か!？」

昇一郎が我有先輩を引き起こして、肩を揺する。が、

「・・・・・・・・」

我有先輩から返答は無い。

別に死んでいるわけではなさそうだが、やられた傷が深いのか、動かないまま気を失っている。

事は、数分前に遡る。

僕と昇一郎は、1-Hの坊主頭君に言われた通りに、転校生が向かったと言う体育館裏に向かっていた。

校舎を出て、そこから体育館を回りこんで裏に行くのだが、
「ん？」

と、昇一郎が一瞬怪訝そうな顔をした。

「どうしたの？」

僕は振り返って、昇一郎を見上げる。

「今、何か変な音しなかったか？」

「変な音？」

言われて僕を耳を傾けてみる。が、特に何も聞こえない。

「気のせいじゃない？」

「いや、確かに聞こえた。何かを殴るような・・・」

殴る、って・・・、と笑おうと思ったら、昇一郎が突然駆け出した。

「え、ちょ、ちよつと待ってよ！」

僕は昇一郎の後ろを走って追いかける。が、昇一郎の足は速く、どんどん離されて行く。

何なんだ・・・。何にもなかったらどうしてくれよう・・・。

そんな事を考えながら足を動かして、

「！」

昇一郎が立ち止まっているのが見えた。

「つと、と・・・」

ぶつからないように止まって、

「どうし」

どうしたの？という言葉の全部を言い切ることなく僕は目を奪われた。

我有先輩。それに、漸樹、鋼器先輩が居た。

それから、誰だろう。ニット帽を目深に被り、顔がよく見えない“誰か”が居た。

何をやっているのだろう。とは“思わなかった”。それはスグに解った。

「戦ってる・・・？」

喧嘩だ。

我有先輩達と、ニット帽が戦っていた。

「ハア・・・、ハア・・・、ハア・・・」

ここから見ても、我有先輩達の疲労は明らかに見て取れる。肩を荒く動かして、何とか呼吸を整えようとしている。

その一方で、ニット帽の方は涼しい顔をして立っている。

しかし、それは仕方の無い事だった。

我有先輩達は一週間前に昇一郎と喧嘩をして、その傷がまだ癒えていないはずだから、それは当然だ。

現に昇一郎も、隠そうとしているものの我有先輩たちとの戦闘でついた傷は癒えきっていない。

つまりこの喧嘩は不平の元での喧嘩に違いなかった。
が、

「けど・・・」と、僕は呟いてしまう。

彼等は“生徒会”の会員だ。それを、如何に傷が癒えてなかつともあまで叩き熨してしまうというのは、ニット帽の実力を物語っている気がする。

「！」

ふと、ニット帽がこちらを見た。

その瞬間、

「？」

気のせいだろうか。ニット帽が“ニヤリ”と笑ったように見えた。
そして、

瞬動

ニット帽が消え、次々に我有先輩、漸樹先輩、鋼器先輩が地面に突っ伏していく。

そして、

ニット帽が姿を消し、今に至る。

第十七話 謎 ニット帽（後書き）

我有がやられ役になってます。

なんかツクツク女キャラが少ない作品です。
ともあれ、楽しんで頂ければ幸いです。

第十八話 保健室

「ったく・・・」

立川先生が不機嫌そうな、困ったような顔をして僕見た。

「何でこんな事になってるの・・・？」と。

立川先生、と言うのはこの学校の保険医をしている女性だ。二十台後半だがその落ち着いた立ち振る舞いから、実年齢よりも高く見える。

ここは保健室の中。我有先輩と鋼器先輩と漸樹先輩は備え付けのベッドの上で眠っている。

先生は我有先輩の体に毛布をかけて、僕の方を見直る。

何で？というのは、勿論我有先輩達の事を指しているのだろう。

が、

「いえ、あの・・・」

説明なんかが出来るはずも無い。

“喧嘩でこうなっちゃいました。テヘ” 何て軽いノリで済むような話じゃない。

喧嘩をした、という事がバレれば、良くて停学。悪くて退学だ。

ましてや人の事。僕が何か言ってそれが元で退学にでもなったら・・・。

そう思うと、思うように口が回らず、僕は「あの・・・」と「えつと・・・」しか言えなくなり、あたふたと手を動かすしか出来なかった。

先生はそんな僕を見、小さく僕にわからないように溜息をついて、

「君がやったの？」と言った。

「ち、違います！僕じゃありません！」

咄嗟に手と首をブンブンと振って答えた。

すると先生は、

「僕“じゃ”ありません、ね・・・」

と、呟いてもう一度溜息を吐いた。

あ、と口を手で慌てて塞いだときには遅かった。

「喧嘩なのね・・・」

悲しそうな声で言う。

「ごめんなさい・・・」

素直に、というか反射的に僕は謝った。

「まあ、私が謝ってもらう事でもないしね・・・」

先生はそう言つて髪をかきあげた。

もう、と呟いて、

「それで？」と僕を見た。

「はい？」

「誰がやったの？つて聞いたの。我有君達をこんなにしちゃうなんて、相当の手誰の仕業よ？」

そうでしょ？ベッドの上で眠っている三人を振り返り、先生は言った。

が、それは違う。と、思う。

この結果はあくまでも我有先輩達が昇一郎との喧嘩で弱っていたからで、多分あのニット帽の実力は我有先輩よりも劣るはずだ。

だから思わず「それは違います」と口に出しそうになった。が、それを言うと今度は昇一郎の喧嘩がバレてしまう。

だから僕は、

「解らないんです」

と、知っている事だけ話した。といっても、情報は皆無に等しいが、解らない、つて？」

「犯人はニット帽を深く被つてて、顔が確認できなかったんです。それに、僕が行った時には・・・」

そう。と、立川先生はもう一回溜息をついた。

「まったく・・・」

最近の若い子は・・・と呟く。

そして、

「いいわ」

と先生は言った。

「今回の事は私の胸の中にとどめておいてあげる」と。

「え、じゃあ」

「ただし」と、先生は僕の声を遮って付け加えるように言う。

「ただし、次は無いわよ？次は上に報告するから」

ああ、それでもいい。これで我有先輩も昇一郎も罰せられずに済む。最終的に巡ってくるかもしれない僕への罰の可能性もなくなる。

「あ、ありが」

「ありがとうございます」

「え？」

僕の声を遮って、立川先生の向こうから声がした。

立川先生はそつちを振り返って、僕も追ってそつちに目をやる。

「が、我有先輩！」

我有先輩がベッドの上で半身を起こしてこちらを見ていた。

といっても、その状態がやっと、という感じで、顔の所々に痣ができています。

何だろう、

一瞬苛つとした。

「このご恩は決して・・・、クツ・・・」

「あ、ダメよ！まだ寝てないと！」

顔を顰めた我有先輩に駆け寄り、立川先生が我有先輩をベッドに寝かせる。

「すみません・・・」

「いいから、今は休みなさい」

ね？と毛布をかけられ、「はい」と我有先輩は頷いて、

「橘」

と、僕を呼んだ。

「あ、はい」

慌てて我有先輩のベッドの横に駆け寄ると、先輩は先生に、

「席を外していただけますか」

と言った。

「・・・ええ。解ったわ」

先生は少し間を置いて頷いて、それじゃあ、と一言残して保健室から出て行った。

「奴はどこに行った？」

少しして、我有先輩が口を開いた。

奴・・・、昇一郎の事だろう。

「それが・・・、さっき先輩達をここに運んでからすぐに出て行ってしまつて・・・」

「解らないのか？」

はい、と僕は頷いた。

「そうか。まあ、いい。とにかく、言いたい事は一つだ」

言つと、我有先輩は半身を再び起こした。

ダメですよ、と言つ僕を右手で制して言う。

「奴には手を出すな」と。

「アイツは俺達が必要探し出して潰す。だからお前等は何もするな
いいな？」と、我有先輩は僕を睨んだ。

「はい。勿論です」

と、僕は笑顔で答えた。

「よし、アイツにもそう伝えておけ」

話はそれだけだ、と、先輩はベッドに再び横になった。

何かを放すような雰囲気でなく、僕はそのまま保健室を出て行った。

僕は一つ先輩に嘘をついた。

先輩は手を出すな、と言ったが、あの要求を聞き入れるつもりはさらさらなかった。

さつきからずっと、苛々が頭の中で巡り巡っている。

ああ、腹が立つ。あのニット帽。

そもそも僕は喧嘩自体は嫌いじゃない。好きじゃないけど、筋の通った真剣勝負は好きだ。

だからこそ武術を続けているわけだし。

が、弱っている人をこれ見よがしに痛めつけるのはどうも気に食わない。

「絶対に見つけてやる・・・！」

あのニット帽！

僕は保健室に居る先輩に聞こえないように、静かに廊下を駆けた。

第十八話 保健室（後書き）

テストやら進路云々で何だかんだ2ヶ月も放置してしまいました。
すみません。

ともあれ、楽しんで頂ければ幸いです。

第十九話 腹が立つ理由

昇一郎は腹を立てていた。

本人も、何故こんなに腹が立っているのかわからないくらいに。

我有朝彦、漸樹鋼器兄弟。

漸樹、鋼器はともかく、我有朝彦までも立てないまでにやられていた。

あの後一応隆平と三人を保健室に運んでいったが、その後すぐに昇一郎は部屋を出た。

今はそのまま、部屋を出た足で廊下を歩いている。

歩きながら、
思う。

腹が立つ。

昇一郎の表情は無表情ではあった。

しかし、確かに腹が立っていた。ただその腹立たしさがどこから来るのか理解できず、昇一郎は表情を作れずにいたのだ。

曲がり角を曲がって、昇一郎は考える。

何で俺は腹を立てているのか？と。

いや、まあ、何だかんだ言っただけある程度の理由は解っている。というか、確定している。

間違いなく、我有明彦達の事についてだろう。

そこまでは解っているのだ。昇一郎自身。

が、解らないのはその先だった。

怪我を負っている相手に対し、更に追い討ちをかける行為。

至極普通の一般人ならば「酷い」と口を揃える事だろう。

が、今回は違う。

そう、昇一郎は思う。

一般人に、我有明彦達にしたような事をしたのならば、「酷い」で事がつく。

が、今回の相手は我有明彦、漸樹、鋼器兄弟である。

あの三人が武術を心得ているのは前回の昇一郎との一戦で明白。

格闘技を習っている以上、それはもうどんな理由をつけようと最終的には『喧嘩の練習』をしているという事になるのだ。

格闘家たるもの、行住坐臥常に戦えなければならぬ。

それがたとえ手負いの時であろうとも、勝負を仕掛けられたのならばそれに答えなければいけない。

だから、今回の件に関しては、昇一郎が腹を立てることではなかった。

あのニット帽は何も間違った事をしていない。

相手が手負いで、その時潰せると思ったのなら、そうして然るべきなのだ。

少なくともあの三人はそういう世界に居る。

そこまで、昇一郎は理解できていた。

そうだと。

だから、俺が腹を立てる必要はないんだ。

そうだと、昇一郎は思う。

そもそも、あの三人を手負いにしたのは昇一郎なのだから。

しかし、それを昇一郎が気に病む事もない。それで“良い”のだから。

この件に決着をつけるとしたら、それはあの三人でしかない。

あの三人以外に居ない。

解っている。

重々、承知している。

なのに、

「腹が立つ・・・！」

昇一郎は呟いた。

呟いて、

立ち止まる。

そして、視線を上げた先。 “ 1 - H ” と記されたプレートが目に入
った。

ああ、と昇一郎は思う。

そうだ。と。

俺は腹が立っている。

ああ、俺は腹が立っている。

そうだ。と、昇一郎は笑った。

それでいい。理由なんか関係無え。

腹が立つのだから、行動する。

そう。

それでいい。

昇一郎は扉に手をかけて、

ゆっくりと、開けるのだった。

第二十話 気配

そこはいつもの教室中だった。

なんの変哲もない、いつもの休み時間だった。

生徒達は楽しそうに雑談をし、教室中はいたつてにぎやかだった。だから、

昇一郎が扉を開けたことに気付いたのは、ほんの数人だったが、

その瞬間、教室中の視線が一斉に昇一郎に集まった。

気配。という言葉がある。

例えば人が怒っていたとする。そうすると、ふとその人が怒っているのが解るときがある。

表情でもなく動作でもなく、ただふと、「あ、怒っているな」と解る。これも一種の気配だ。

昇一郎が発していた“気配”は、その存在を教室中に知るに至らせる程のソレだった。

昇一郎の存在を知ったと同時に、教室中の音が見事に消え去る。

生徒達は身動きもとらず、言葉さえも発せずにその場に固まったように動かない。

昇一郎はその中を歩いていく。周りを見回し、探す。

勿論、探している相手は我有明彦達をボコボコにした相手だ。

キョロキョロと、“ソイツ”を探す。

誰を探しているのか？

前述したように、我有明彦達をあんな状態にした相手の正体はわかっていないはずである。

では、昇一郎はあのニット帽の正体を、保健室からここに来る間に確定させたのであろうか？

答えは、

否、^{いな}だ。

例に漏れる事無く、昇一郎自信もあのニット帽の正体を理解できていない。

しかし、昇一郎にも“ある事”だけは理解できた。それは、“気配”。

強い、喧嘩が強い人間が発する気配。

それだけは、昇一郎にもわかる。

そして、それを頼りに昇一郎はある生徒の前に立った。窓際の、一番後ろの席。

「テメエだな・・・」

低い、それでも若干嬉しそうな声で、昇一郎は呟いた。

“ 桜屋敷 重蔵 ”

その生徒の机に置かれているノートに、そう記されている。

「何だ・・・？」

桜屋敷は視線を外から昇一郎に移し、気だるそうに言った。

「悪いんだけどよ、ちよつとツラ貸してくんねえかな？」

我有の時のように挑発的ではなく、きわめて静かに、それでも感情のこもった声が教室の中に響く。

桜屋敷は何言わず黙ったまま、

ガタ・・・ッ

音をたてて椅子から立ち上がった。

「どこに連れて行かれるんだ？」

桜屋敷は静かに言った。

そして加えるかのように一言、

「体育館裏にでも行くか？」

と、言った。

昇一郎は、「ああ、そうしようか」と一言答え、
二人は一緒に、教室を出て行くのだった。

第二十話 気配（後書き）

二十話目です。
夏休みです。
それだけです。

第二十一話 立ち振る舞い

体育館裏。

昇一郎と重蔵は対峙するようにしてそこに居た。

睨みあうように といつても一方的に昇一郎が睨んでいるだけだが、二人は向き合っている。

二人とも言葉を発しないまま、もうかれこれ5分ほど経とうとしている。

が、

その沈黙を、

「それで？」

重蔵から破っていった。

「何のようで、俺をここに？」

ナイフで顔に切れ目を入れたかのような細い目で、それでもじっと昇一郎を見つめる。

「ああ？」

その視線にも腹立たしさを感じながら冷たく、低いトーンで、まるで突き飛ばすかのような口調で昇一郎は重蔵を睨んだ。

「んな事はテメエが一番分かってんじゃないか？」

言い放つ。

その言葉に、重蔵は細い目を更に細める。

「告白・・・、っていうわけじゃあなさそうだ・・・」

当然だ。と、大きな声を張り上げることなく、飽くまでも重蔵を睨みながら言う。

ああ、

腹が立つ。

最初は明彦の件で腹が立っていた。
が、今は、

コイツの立ち振る舞いが腹立つ。

なんか・・・、

腹が立つ！

何か当初の目的とかそんなのは半分以上ソツチノケになつてきたが、
ともかく昇一郎は猛っている。

それは間違いない。

しかし、

猛りながらも、先ほどから昇一郎は冷静に重蔵を分析していた。

相手の力量を測るのは、格闘技だけでなく喧嘩にも必要な力である。

昇一郎の得意とする事の一つでもあった。

先から昇一郎は重蔵を見ていた。

ここに来てからは勿論、教室からここへと来るまでも。

その間、昇一郎は重蔵に対して一つ疑問を持っていた。

それは、重蔵の“立ち振る舞い”。

この学校に来る人間というのは、昇一郎のような例外を除いて武術
を習っている者ばかりだ。

武術を習っている人間というのは、計らずも必ずその立ち振る舞い
に“程度”が現れる。

それが熟練されている人間ならば、尚更。

明彦達を倒すような人間が、こんな“立ち振る舞い”であるだろう
か。

重蔵からは武術の“程度”どころか、その経験の有無さえも見て取
れない。

言うなれば、全くの『素人』の動きだ。

昇一郎はその事で、若干重蔵に疑問を抱き始めていたが、もう腹が立ってきたので関係ない。

とりあえずブン殴る。これはもう決定事項。

シリアスなシーンも一気にギャグに変えてしまう昇一郎のテンションに感服。

ともあれ、昇一郎は重蔵に掴みかかる気は満々だ。

「テメエが犯人だって事はもう分かってんだ」

分かってないが、とりあえずそんな事を言って重蔵の胸倉に掴みかかる。

「とつとと白状しやがれ」

もう根拠も何もないままに、グイツ、と掴んだ重蔵の襟を持ち上げ

た、その刹那。

ゴッ

風が唸り、

ドグッ

「ゴエッ!!!」

昇一郎は後ろへとふつとばされていた。

どうやら一筋縄ではないかない。

吹っ飛びながら、昇一郎はそれでも笑みを浮かべているのであった。

第二十一話 立ち振る舞い（後書き）

就職だ、進学だと気の遠くなるような毎日です。
それだけです。

第二十二話 搜索

全く・・・、昇一郎はどこに行つたのだろう。

周りをくまなく見回しながら、僕は生徒達で賑わっている廊下を歩いていた。

もうそろそろ掃除の時間になろうというのに、生徒達は依然として楽しそうに雑談を繰り広げている。

僕はそんな中を掻き分けながら、ただひたすら昇一郎を探していた。保健室を出たきり、ずっと昇一郎の行方を追っている。

一旦教室に戻つてみたがそこに姿はなく、僕は踵を返して再び探索を再開した。

ただ、“探している”といつても、昇一郎が“何をしに向かった”のかは分かっていた。

恐らく、ではあるが。

昇一郎は静かに猛つていた。

それは、保健室に居る時点で分かっていた。

それが我有先輩が倒されたことへの怒りなのか何なのかは、「これ」といった確証がないからハッキリとは言えない。

ただ、昇一郎は“怒っていた”。それだけは確かだ。
だったら、昇一郎はどこに行くか？

間違いなく、犯人を捜しに行くだろう。

我有先輩を倒した、相手を。

探すにしても、手がかりはどこにも無い。

いくら昇一郎でも、その状態から犯人を探し出そうとは思わないだろうし、見つけれない。

だったら、まずは手がかりから探す。

その手がかりはどこにあるのか？

そうなれば、昇一郎が行き着く場所は、恐らくここ。

僕は足を止めて、顔を上げた。

本日見るのは二度目となる“1-H”と書かれたプレートを見上げつつ、僕は1-Hの扉を開けた。

本日三度目となる他クラスの生徒の侵入に、再びクラス全員の視線は扉の方へと向いた。

これは別に、僕から強そうな気配とかが出ていたわけではなく、単に1-Hの生徒達の神経が敏感になっているだけである。ただ、その反応を見て僕は確信した。

昇一郎は、僕が来る前に一度ここに戻ってきている。と。だったら。と、僕は周りを見回した。

探すのは、僕と昇一郎を体育館裏へと誘った張本人。

その張本人はスグに見つけることができた。

僕はその張本人である、あの坊主頭の子に向かって手招きした。その子は一瞬嫌な顔を浮かべたが、すぐにこっちに来てくれた。そして第一声、

「何？」

昇一郎には敬語だったのに、僕にはタメ口だ。

いや、別に敬語で話してもらいたいわけじゃあないけど、なんか若干腹が立つな。

ともかく、今はそんな事どうでもいい。

僕は、

「すぐに済ませるから」

と、坊主頭君を廊下に連れ出した。

「何？」

再び、坊主頭君は言った。

「あ、いや、昇一郎・・・、あの銀髪でデカイのはどこに行ったか聞きたくてさ」

「ああ。彼・・・」

一瞬考えた後、

「体育館裏に行つたよ」

坊主頭君は行つた。

「体育館裏？」

何をしに？

「さあね。なんにしても、君は行かないほうがいいよ。どうやら険悪なムードらしいから」

「え？誰かと一緒に行つたの？」

「ああ、例の転校生とね。あの後何があつたのか知らないけど、凄く彼怒つてたよ」

やつぱり怒つてる・・・。

と、すれば、急がないとその「転校生」が危険だ。

「ありがとう。じゃあ」

僕は体育館裏へと足を進めた。
が、

「あ、ねえ」

坊主頭君に呼び止められて歩を止める。

「？」

「やつぱり君は行かないほうがいいよ。彼、とても強いって噂だけど、あの転校生も我有先輩を倒しちゃうくらい強いんだから」

「・・・・・・そうだね。気をつける」

僕はその坊主頭君の言葉に何か・・・、若干の違和感を感じつつ、それでも体育館裏へと急いで向かうのだった。

第二十二話 搜索（後書き）

周りが就職決まったり自動車学校だったりで忙しそうです。
それだけです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7434a/>

けんか上等！生徒会長 昇一郎！

2010年10月15日20時10分発行